

芝山町宮郷台遺跡

— 主要地方道八日市場八街線歩行者道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和4年3月

千葉県教育委員会

しば やま まち みや ごう だい い せき
芝山町宮郷台遺跡

—主要地方道八日市場八街線歩行者道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書—



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第40集として、主要地方道八日市場八街線歩行者道整備事業に伴って実施した芝山町宮郷台遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、縄文時代後期から晩期にかけての竪穴住居跡や土坑などが発見されました。また、古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡なども発見され、台地上に存在した縄文時代および古代の集落の一端を明らかにすることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 田中 文昭

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部成田土木事務所による主要地方道八日市場八街線歩行者道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

宮郷台遺跡 山武郡芝山町小池946ほか(遺跡コード409-050)
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る整理作業は、千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、以下のとおりである。

文化財課長 田中文昭 発掘調査班長 吉野健一 担当者 文化財主事 菅澤由希
○発掘調査 令和3年8月2日～令和3年9月30日
内容 確認調査 上層 606m²/606m² 下層 12m²/606m²
本調査 上層 543m²/606m²
- 5 ○整理作業 令和3年9月1日～令和3年12月28日
内容 記録整理から報告書刊行
- 6 本書の執筆・編集は、文化財主事 菅澤由希が行った。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、芝山町教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、同成田土木事務所、(公財)千葉県教育振興財団 橋本勝雄氏、(公財)千葉県教育振興財団 小川慶一郎氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 9 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「多古」「成東」平成4年
第2図 芝山町発行 1/2,000 芝山町地形図
- 10 9 國版1の航空写真は、国土地理院発行による平成26年撮影のものを使用した。
- 11 遺構種別記号は竪穴住居跡=SI、土坑=SK、掘立柱建物跡=SB、溝=SD、ピット=SHとした。

挿図中の「K」は擾乱の略である。なお、SK009、SK037、SH003、SH011、SH078は欠番である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の経緯と経過.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	1
1 遺跡の位置と地理的環境.....	1
2 周辺の遺跡と歴史的環境.....	1
第3節 調査の方法と調査概要.....	6
第2章 検出した遺構と出土遺物.....	9
第1節 純文時代.....	9
1 壊穴住居跡.....	9
2 土坑.....	12
3 ピット群.....	25
4 遺物包含層.....	26
第2節 古墳時代以降.....	32
1 壊穴住居跡.....	32
2 土坑.....	32
3 掘立柱建物跡.....	35
4 溝状遺構.....	35
第3節 遺構外出土遺物.....	37
第3章 総括.....	41
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 宮郷台遺跡と周辺の遺跡(1:25,000).....2	第15図 SK026・SK028・SK029・SK039	21
第2図 調査範囲と周辺の調査成果(1:2,000).....5	第16図 SK030・SK031・SK032・SK033	
第3図 グリッド配置図.....6	SK034	23
第4図 下層確認グリッド配置図と基本層序.....6	第17図 SK035・SK036・SK038	24
第5図 遺構配置図(北側).....7	第18図 ピット群(1)	27
第6図 遺構配置図(南側).....8	第19図 ピット群(2)・遺物包含層	28
第7図 SI001(1).....10	第20図 ピット群出土遺物(1)	30
第8図 SI001(2).....11	第21図 ピット群出土遺物(2)	31
第9図 SK001・SK008	第22図 SI002・SI003	33
第10図 SK010・SK011・SK013・SK014	第23図 SK002・SK004・SK005・SK006	
第11図 SK015・SK040・SH047	SK007・SK012・SH053	34
第12図 SK016・SK017・SK018	第24図 SB001・SB002・SB003・SD001	36
第13図 SK019・SK020・SK021・SK022・ SK023	第25図 遺構外出土遺物(1)	38
第14図 SK024・SK025	第26図 遺構外出土遺物(2)	39
	第27図 遺構外出土遺物(3)	40

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	3	第3表 ピット一覧	29
第2表 SK024出土貝類集計結果	20		

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版8 SB001・SB002・遺物包含層土層断面
図版2 遺構配置状況・SI001・SD001	図版9 SI001出土遺物・縄文時代土坑出土遺物(1)
図版3 SI001～SI003・SK001	図版10 縄文時代土坑出土遺物(2)・(3)
図版4 SK002・SK004～SK008・SK010	図版11 縄文時代土坑出土遺物(4)・ ピット群出土遺物(1)
図版5 SK011～SK016・SK040・SH047・ SH052・SH053	図版12 ピット群出土遺物(2)・(3)・ 遺構外出土遺物(1)
図版6 SK018・SK023～SK029	図版13 遺構外出土遺物(2)・(3)
図版7 SK030・SK031・SK033～SK036・ SK038・SB003	図版14 縄文時代遺物・古墳時代以降遺物・石器

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

芝山町は千葉県の北東部に位置し、芝山町の南部を東西方向に走る県道八日市場八街線は、匝瑳市八日市場から八街市に至る主要地方道である。芝山町小池地先における歩行者道整備事業を行うにあたり、令和元年12月に、千葉県成田土木事務所長より事業地内における「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では、令和2年1月に事業計画地内に宮郷台遺跡が所在する旨の回答を行った。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、令和3年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が発掘調査および整理作業を実施することとなった。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

千葉県北部の大半を占める下総台地は、標高40m前後の比較的平坦な台地面で、太平洋、利根川、東京湾へ注ぐ多くの中小河川によって樹状に浸食され、複雑な地形を形成している。宮郷台遺跡が所在する芝山町は、千葉県の北東部、下総台地の南東部に位置し、太平洋に注ぐ木戸川および、栗山川の支流である高谷川に開拓された沖積地と下総台地から成っている。木戸川や高谷川に面する台地の縁辺部には多数の小支谷があり込み、大小の舌状台地が発達している。宮郷台遺跡は、木戸川と高谷川に挟まれた舌状台地上に位置する遺跡で、台地上はほぼ平坦で標高41m前後、木戸川から遺跡の南側に入り込む小支谷との比高は10m程である。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

宮郷台遺跡の周辺には縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が密に分布し、縄文時代中期から晩期の貝塚として有名な山武姥山貝塚や、殿塚・姫塚を擁する国指定遺跡の芝山古墳群を代表とする古墳群などがよく知られている(第1・2図、第1表)。ここでは、宮郷台遺跡と時期が関連する周辺の遺跡について、縄文時代後・晩期および古墳時代後期から奈良・平安時代の集落遺跡を中心に概要を述べる。

縄文時代後・晩期の主要な遺跡としては、宮郷台遺跡の南東に位置する山武姥山貝塚のほか、北東に位置する境貝塚、高谷川沿いの高谷川低地遺跡などが挙げられる。山武姥山貝塚は千葉県の太平洋側の貝塚では最大規模を誇る貝塚で、前期から晩期最終末に至る土器が出土している。境貝塚は後期掘之内1式期が主体となるが、晩期の遺物も出土している。高谷川低地遺跡は、土器だけではなく丸木舟や丸木弓、漆塗竹櫛などの木製品が豊富に出土している低地遺跡である。小池麻生遺跡、御田台遺跡、井戸作遺跡、居合台遺跡でも、遺構は確認されていないものの後・晩期の遺物が確認されている。

古墳時代から奈良・平安時代にかけての主要な遺跡は、宮郷台遺跡の北側に位置する小池麻生遺跡のほか、御田台遺跡や京寺遺跡などが挙げられる。小池麻生遺跡は古墳時代後期を主体とし奈良・平安時代までの竪穴住居跡が検出されており、宮郷台遺跡と関連の深い集落が展開していたとみられる。京寺遺跡は昭和57年に小池元高田遺跡として調査が行われており、古墳時代の遺構は比較的少なく、奈良・平安時代の竪穴住居跡が中心である。



第1図 宮郷台遺跡と周辺の遺跡 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧

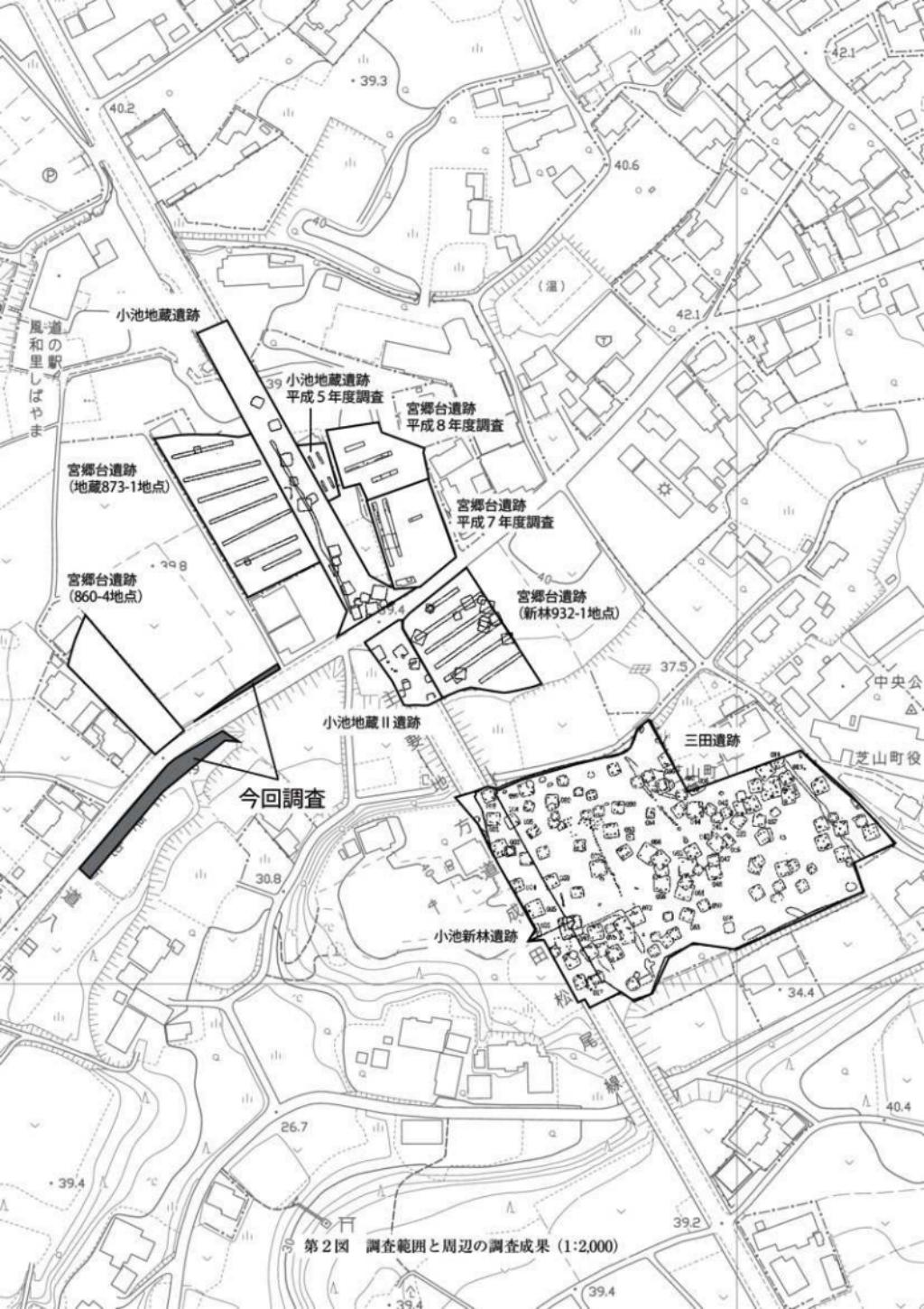
遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 伊賀台遺跡	縄文(後)・古墳(中・後)、奈良・平安、中・近世	78 金谷遺跡	平安
2 小山城生遺跡	縄文(中)・古墳(後)、奈良・平安	79 山田遺跡	平安、平安
3 桜田台遺跡	旧石器、縄文(後)・古墳(中・後)、奈良・中・近世	80 穂山遺跡	平安(前～後)
4 立石遺跡	旧石器、縄文・古墳(後)、奈良・平安	81 平三郷遺跡	縄文(後)・古墳
5 岸口遺跡	縄文(後)・晚)	82 芝草台遺跡	古墳(後)
6 清水台遺跡	縄文(早)・古墳(後)	83 宝木作久遺跡	旧石器、縄文(早～後)、平安、近世
7 井手城遺跡	奈良・平安	84 宝馬遺跡	縄文(早)
8 久須志跡	縄文(中・後)・古墳(後)、奈良・中・近世	85 板木遺跡	縄文(早・前)
9 町山遺跡	古墳(後)	86 清田台遺跡	古墳(後)、奈良・平安
10 新川田城跡	中・近世	87 冷ノ台遺跡	縄文(早)・奈良・平安
11 打越遺跡	縄文(早)・古墳(後)、奈良・平安	88 清田台遺跡	古墳(後)、奈良・平安
12 小幡台遺跡	縄文(早)	89 オワリ田台遺跡	奈良・平安
13 外堀遺跡	縄文(早)・前)・古墳(後)	90 向台遺跡	古墳
14 鹿島台遺跡	古墳(後)	91 朝倉城跡	中・近世
15 大谷原台遺跡	縄文(早)・古墳(後)、奈良・平安	92 小田木遺跡	旧石器、縄文(後)・奈良・平安
16 山ノ内遺跡	縄文(早)	93 平野遺跡	奈良・平安
17 香山遺跡	縄文(早)	94 江見遺跡	縄文(後)・奈良・平安
18 蔵原作白遺跡	旧石器、縄文(前)、奈良・平安、中・近世	95 綾治原の台遺跡	縄文(中)
19 浅見台遺跡	縄文(後)・古墳	96 丹来上原跡	縄文(前)・奈良・平安
20 山ノ内遺跡	旧石器、縄文(後～後)、古墳(後)、奈良・平安	97 上貝東ノ遺跡	縄文(前)・奈良・平安
21 離見遺跡	縄文・古墳(後)、奈良・平安、中・近世	98 丹山城跡	中・近世
22 高畠山跡	中・近世	99 箕遺跡	縄文(早)・古墳(後)、奈良・平安
23 古内城跡	縄文(中)・古墳(後)	100 大丸遺跡	縄文(前)
24 大谷西垂・作道跡	縄文(早)・古墳(後)、奈良・平安	101 古谷上・谷道跡	旧石器、縄文(中・後)・古墳、奈良・平安、中・近世
25 朝合山遺跡	縄文(前)・後)、古墳(後)	102 別谷台遺跡	旧石器、縄文(中)・古墳、奈良・中・近世
26 清木遺跡	縄文(早)・古墳(後)、奈良・平安	103 大原御所跡	旧石器、縄文(早)・奈良・平安、中・近世
27 下ノ原城跡	中・近世	104 宝来台遺跡	縄文(前)・奈良・平安
28 田内遺跡	縄文(前)・後)・古墳(後)、中・近世	105 京坂	中・若狭
29 大丸遺跡	縄文(前)・中)・奈良・平安	106 田山山遺跡	奈良・平安
30 新紀遺跡	旧石器、古墳(後)	107 八十石遺跡	縄文
31 但馬遺跡	縄文(後)	108 人吉遺跡	縄文(早・中・後)・晚)・古墳(後)、奈良・平安、中・近世
32 新林遺跡	奈良・平安	109 亂葉遺跡	古墳(後)
33 亂葉遺跡	奈良・平安、近世	110 朝日伴ノ台遺跡	古代
34 篠原作道跡	奈良・平安、近世	111 スノコ遺跡	古墳(中)
35 山内城跡	中世	112 オマコ台遺跡	縄文(早)・奈良・平安
36 氷風山横穴群	古墳	113 新田遺跡	古墳(後)・奈良・平安
37 千葉遺跡	縄文(後)・晚)	114 内野遺跡	古墳(後)・奈良・平安
38 高谷原乳頭山遺跡	縄文(後)・晚)	115 芝山古跡群(中古古跡群)	古墳
39 街道遺跡	縄文(前)・古墳(中)・奈良・平安	116 壇ノ上・塚跡	旧石器、縄文(早～晚)・古墳(後)
40 郡庭古城跡	中・近世	117 中古上原跡	縄文
41 望ノ宮遺跡	縄文・古墳	118 中古山遺跡	旧石器、縄文(中・後)
42 百舌鳥野上町遺跡	弥生	119 丘伏谷跡	古墳(後)・奈良・平安
43 宮城城跡	中・近世	120 大坂塚跡	古墳(後)・奈良・平安
44 下吹・東吹遺跡	弥生(後)・古墳(後)・後)	121 中台八幡跡	縄文(中・後)・古墳(後)
45 宮山遺跡	縄文(中・近世)	122 中台上・土山古遺跡	縄文(早・中・後)・古墳(後)
46 塚山塚	縄文(前)・後)	123 石作古跡群	縄文(中・後)・奈良・平安
47 千利台遺跡	縄文(後)・古墳(後)、奈良・平安	124 舟山遺跡	縄文(中・後)
48 犬谷山遺跡	縄文(前)・後)	125 西山遺跡	旧石器、縄文(中・後)
49 手向山台遺跡	縄文(早)・古墳(後)、奈良・平安、中・近世	126 北山長谷遺跡	旧石器、縄文(早・後)・晚)・奈良・平安、中世
50 上吹山遺跡	旧石器、縄文(中)・古墳(後)、奈良・平安	127 東山山遺跡	旧石器、縄文(早・後)・奈良・平安、中世
51 長谷寺遺跡	古墳、奈良・平安、中・近世	128 上ノ原山遺跡	旧石器、縄文(中・後)・舟生
52 東吹遺跡	旧石器、縄文(中)・古墳	129 長山山遺跡	縄文(前・後)・古墳(後)
53 林小屋子台遺跡	旧石器、縄文(早)・古墳	130 大山遺跡	縄文(中・後)
54 仲ノ原ノ台遺跡	旧石器、縄文(早)・古墳	131 三武越山古墳	縄文(中・後)
55 吹火山遺跡	旧石器、縄文・古墳、平安	132 仁被遺跡	奈良・平安
56 上吹山遺跡	古墳(中)	133 山室入門古遺跡	縄文(中)
57 上吹山城跡	中・近世	134 山室入門古遺跡	縄文(早～中)・奈良・平安
58 仲ノ原	古墳、奈良・平安、中・近世	135 山室入門古遺跡	縄文(中)
59 横谷遺跡	縄文(後)	136 山室入門古遺跡	縄文(中)
60 小幡子大谷遺跡	縄文(中)・古墳(後)、奈良・平安	137 山室入門古遺跡	旧石器
61 丸山遺跡	古墳	138 清台遺跡	縄文(早・前)
62 佐野遺跡	縄文(古墳(後))・奈良・平安	139 広場遺跡	古墳、奈良・平安
63 谷井・上著遺跡	縄文(前)・古墳、奈良・平安、中世	140 小原子小山古遺跡	旧石器、縄文、奈良・平安
64 大谷城跡	中・近世	141 丘反田島遺跡	奈良・平安、中世
65 中ノ平山遺跡	古墳、平安・近世	142 丘反田島水沢遺跡	奈良・平安、中世
66 寺ノ内山遺跡	縄文・古墳(後)、奈良・平安	143 千芝遺跡	縄文(中)・古墳、奈良・平安
67 田内遺跡	奈良・平安	144 山田・宝馬古墳群	古墳
68 上吹子城跡	中・近世	145 上吹丸・林古墳群	古墳
69 仁久遺跡	奈良・平安	146 高田古墳群	古墳
70 鹿島城跡	中・近世	147 沼津古墳群	古墳
71 清水遺跡	縄文(後)	148 魔部古墳群	古墳
72 清川田遺跡	縄文(中)	149 庵上山・郡古墳群	古墳
73 石井遺跡	古墳	150 ヤノ山古墳群	古墳
74 馬場遺跡	縄文(前)	151 小池古墳群	古墳
75 菊作台遺跡	縄文(早)・古墳、奈良・平安	152 三田古墳群	古墳
76 小鶴遺跡	縄文(早)	153 鮎塚古墳群	古墳
77 仙台古墳	古墳	154 両野古墳群	古墳

続いて、宮郷台遺跡において行われたこれまでの調査成果について概要を述べる(第2図)。宮郷台遺跡は、過去に小池地蔵遺跡・小池地蔵Ⅱ遺跡、三田遺跡・小池新林遺跡として調査され、現在は一つの遺跡として取り扱われている遺跡である。主要地方道成田松尾線の建設に伴う調査では、今回の調査地点の東側に隣接する範囲が小池地蔵遺跡および小池地蔵Ⅱ遺跡として調査され、古墳時代後期の竪穴住居跡を中心に奈良・平安時代にかけての遺構が検出されている。宮郷台遺跡の平成7・8年度調査地点では、確認調査のみだが古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡等が検出されている。宮郷台遺跡(新林932-1地点)や宮郷台遺跡(地蔵873-1地点)の調査でも、竪穴住居跡等、古墳時代後期の集落が検出されている。今回の調査地点の北側に隣接する宮郷台遺跡(860-4地点)では、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒と奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟等が検出されている。今回の調査地点の南東側では、公共施設建設に伴う調査で三田遺跡として、また、主要地方道成田松尾線の建設に伴う調査で小池新林遺跡としてそれぞれ発掘調査が行われ、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落跡が検出されている。このように、宮郷台遺跡が立地する台地上には古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての集落が広い範囲に展開していたことが明らかになっている。

また、小池地蔵遺跡と小池地蔵Ⅱ遺跡の調査では、縄文時代後期中葉から晩期を主体とした土器群が遺構外出土遺物として報告されている。宮郷台遺跡(地蔵873-1地点)では、縄文時代の遺物として堀之内式、加曾利B式、後期安行式、晚期安行式の土器が報告されており、特に加曾利B式が顕著に認められる。宮郷台遺跡(860-4地点)では、縄文時代後・晩期の遺物が豊富に含まれる遺物包含層が検出され、とりわけ前浦式土器が多く出土したと報告されている。このことから、宮郷台遺跡が立地する台地上では、古墳時代から奈良・平安時代の集落以外にも、縄文時代後期から晩期の集落が継続的に営まれていたことが想定される。

【参考文献】

- (財)千葉県文化財センター 1983「小池麻生遺跡」「主要地方道成田松尾線I」
(財)千葉県文化財センター 1985「小池新林遺跡・小池地蔵遺跡」「主要地方道成田松尾線II」
(財)千葉県文化財センター 1986「小池元高田遺跡」「主要地方道成田松尾線IV」
芝山町教育委員会 1989「千葉県山武郡芝山町三田遺跡発掘調査報告書」
芝山町 1995「芝山町史 通史編 上」
(財)千葉県文化財センター 1991「芝山町小池地蔵Ⅱ遺跡」「主要地方道成田松尾線VI」
(財)千葉県文化財センター 1992「芝山町御田台遺跡・小池新林遺跡」「主要地方道成田松尾線VII」
(財)山武郡市文化財センター 1995「千葉県芝山町居合台遺跡」
(財)山武郡市文化財センター 1996「財團法人山武郡市文化財センター年報11」
芝山町教育委員会 1998「宮郷台遺跡(地蔵873-1地点)」「平成9年度芝山町内遺跡発掘調査報告書」
(財)山武郡市文化財センター 1999「宮郷台遺跡(地蔵873-1地点)」
芝山町教育委員会 1999「宮郷台遺跡(新林932-1地点)」「平成10年度芝山町内遺跡発掘調査報告書」
(公財)千葉県教育振興財団 2021「山武郡芝山町宮郷台遺跡発掘調査報告」「千葉県教育振興財团文化財センター年報No.46-令和2年度-」



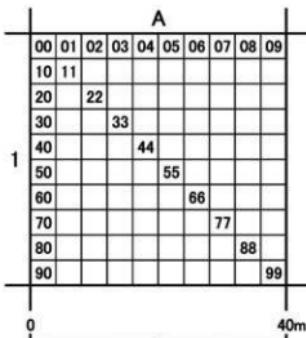
第2図 調査範囲と周辺の調査成果 (1:2,000)

第3節 調査の方法と調査概要

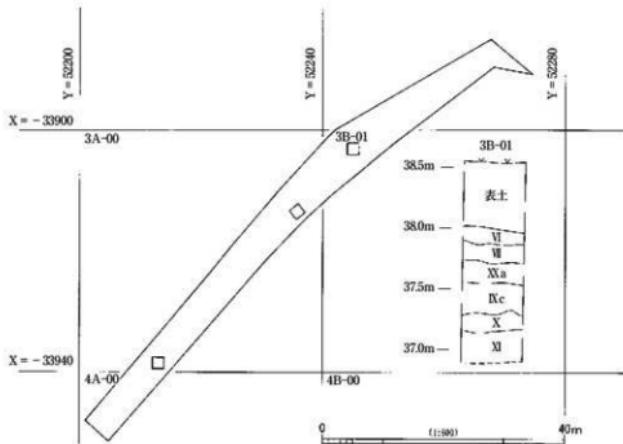
調査にあたっては、調査範囲を網羅するように、世界測地系に基づくグリッド設定を行った。X = -33.820、Y = 52.200を起点とする40m × 40mの方眼を大グリッドとし、北から南へ1～4、西から東へA～Cとし、更に大グリッドを4m × 4mの小グリッドで分割し、北西隅から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東隅を99とした。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「1A-01」のように座標軸による小グリッドで地点を表すこととした(第3図)。調査範囲は県道八日市場八街線を挟んで南北に分割されており、道路の北側の調査範囲はわずか63mと極めて狭長であったため、トレンチ状に人力で表土の掘削を行い、遺構の検出を行った。道路の南側の調査範囲は重機による全面表土除去による確認調査を行った。南端部においては、千葉県で通常II層とされる、縄文時代以降の遺物を包含する漸移層が遺存していた。しかし、大部分は転圧や耕作等の影響を受け、立川ロームV層より上が攪乱を受けた状態であった。

確認調査の結果、遺構・遺物が確認されたことから、調査対象範囲606m²のうち南側の調査範囲全体である543m²を本調査範囲とした。下層確認調査は南側の調査範囲内で行ったが、遺物が出土しなかったため、確認調査で終了した(第4図)。

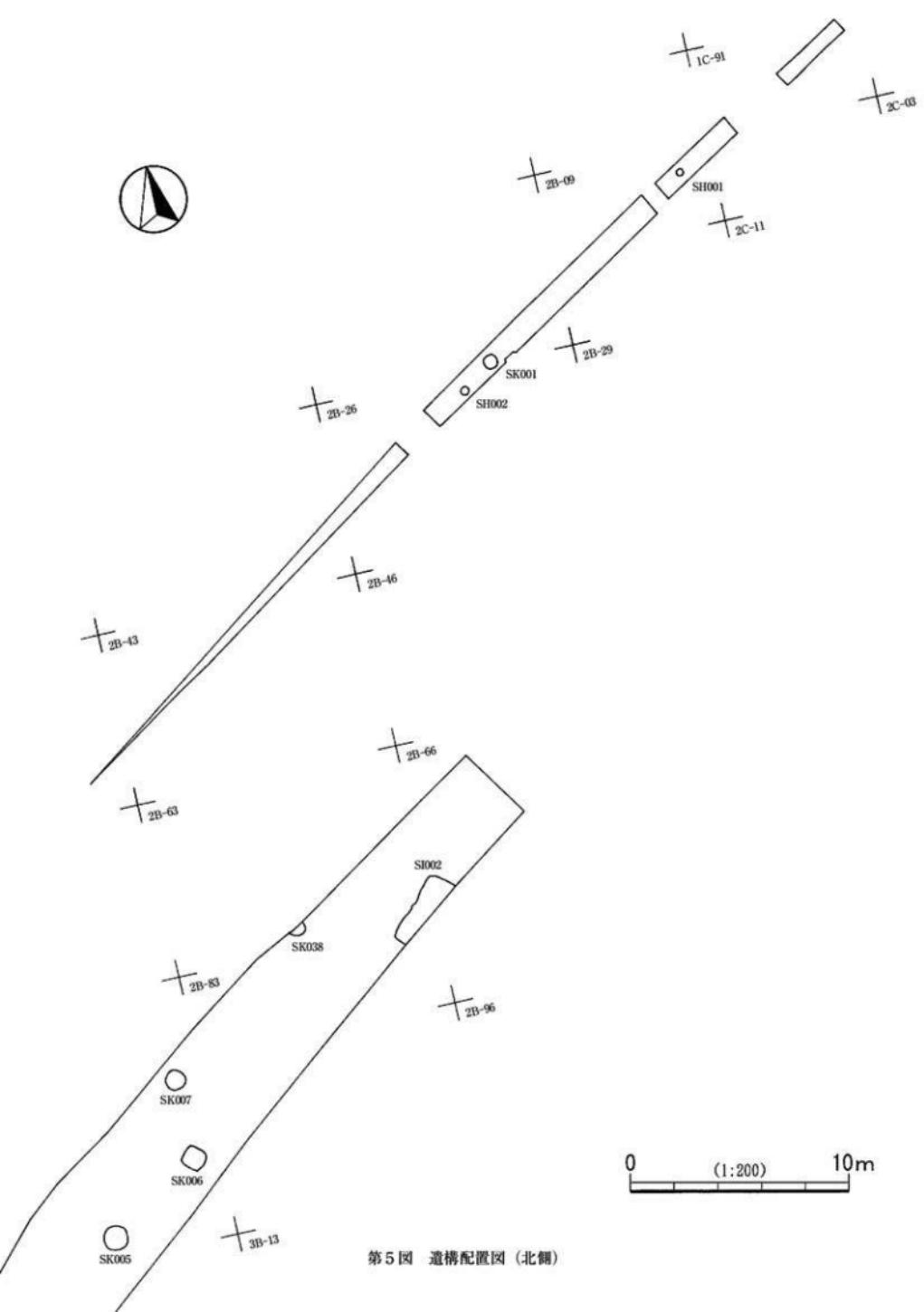
調査の結果、検出された遺構は縄文時代の堅穴住居跡1軒、土坑31基、ピット群1か所、縄文時代後・晩期遺物包含層1か所、古墳時代～奈良時代の堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土坑5基、溝状遺構1条、中・近世の土坑2基である(第5・6図)。主体となるのは縄文時代後・晩期の遺構で、SI001は周辺の遺跡では検出例がない縄文時代晩期前葉に属する堅穴住居跡として貴重な調査成果である。



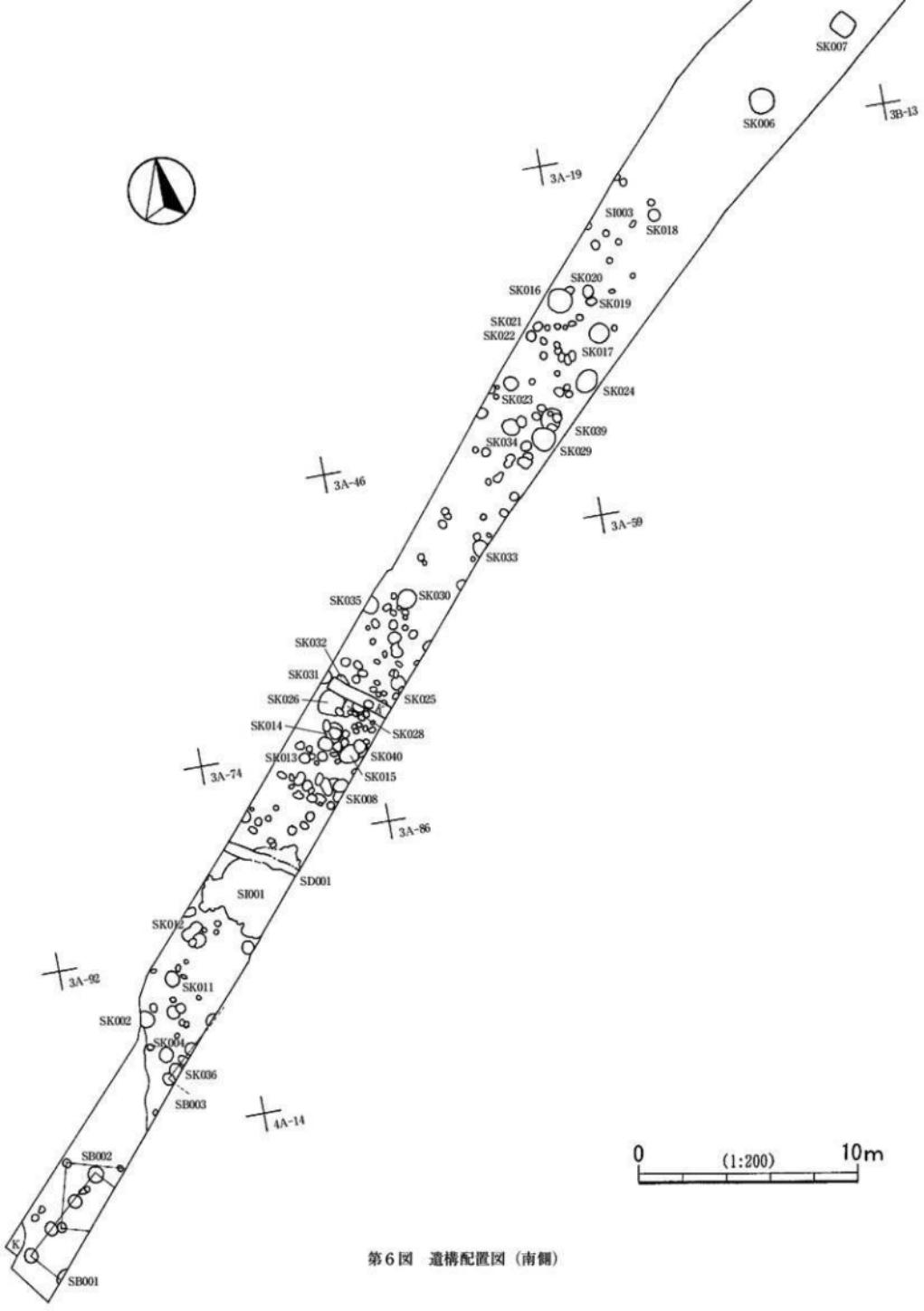
第3図 グリッド配置図



第4図 下層確認グリッド配置図と基本層序



第5図 遺構配置図（北側）



第6図 遺構配置図（南側）

第2章 検出した遺構と出土遺物

第1節 繩文時代

1 壓穴住居跡

SI001(第7・8図、図版2・3・9・14)

3A-83・84グリッドに位置する。南東側は一部調査区外となり、北東側はSD001に切られている。平面形は円形で、西側と北東側に入口施設を伴う。入口施設を除く直径は約3.5mである。西側の入口施設Aと中央の炉を結んだ線を主軸とすると方位はN-100°-Eである。擾乱によって上面が大きく削平されており、壓穴の遺存状況は極めて悪く、壁高は良好な部分で5.1cmである。

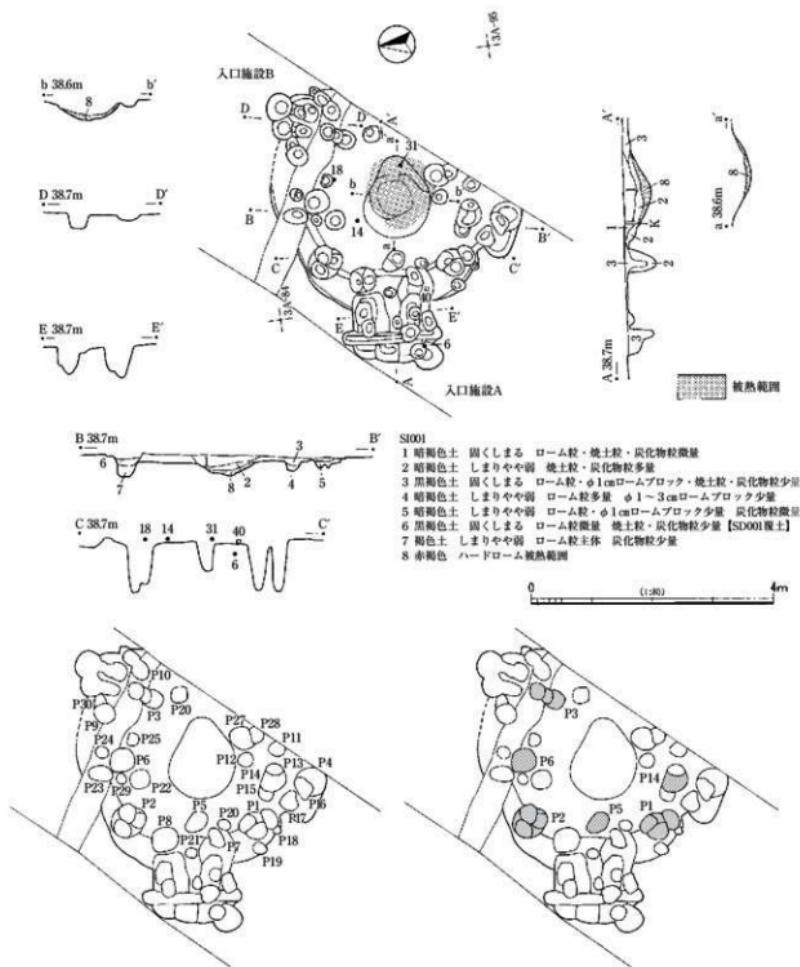
炉は中央からやや西寄り、入口施設Aの延長線上に位置する。平面形は長軸約1.4m、短軸約1.1mの楕円形で、住居の規模に対して大型であるといえる。断面はすり鉢状で、床面から火床面までの深さは25cmである。火床面下のハードロームは約10cmの深さまで被熱し赤色に変色している。

西側および北東側の2か所に、入口施設と考えられるビットと溝が検出されている。西側に位置する大型の入口施設Aは、コの字状に並ぶ複数のビットと溝によって構成されており、入口部分を塞ぐかたちで南北方向に板状のものをはめ込んでいたような細い溝が確認できる。一方、北東側に位置する入口施設Bは入口施設Aと比べて小規模なものである。入口施設Aと入口施設Bは機能していた時期に差があると考えられるが、検出された遺物からは明確な新旧関係を見出すことはできない。

柱穴については、P1～P3・P5・P6・P14が比較的深くしっかりした柱穴であり、いずれも主柱穴の可能性がある。P1～P3は床面から60cm以上の深さがあり、それぞれが直径約30cmの3つのビットにより構成されている。このことから、ほぼ同じ場所で少なくとも2回の建替えが行われた可能性が高い。また、P2とP3の間に位置するP6、P6と炉ⁱを挟んで対角線上にあるP14は、直径約40cmと比較的大きく、深さもP1～P3に次いで深く30cm以上である。P1とP2の間に位置するP5も深さが45cmと比較的深い。調査時には、遺構の拡張や重複を想定しSI001周辺の柱穴の検出に努めたが、本遺構に伴うと判断できる柱穴は検出できなかった。

遺物は、後期中葉から晩期前葉にかけての土器および石器が覆土から出土している。1～4は堀之内式と考えられる深鉢である。5～9は加曾利B式と考えられるが6は曾谷式の可能性がある。10～12は安行1式、13～18は安行3a式、19～32は安行3a式～安行3b式と考えられる。14～17は同一個体とみられる。33・34は姥山II式と考えられる破片である。34は炉ⁱの覆土から出土した。35・36は鉢の口縁部で、いずれも大洞BC式と考えられる。37～39は条線のみが施される粗製深鉢で安行3c式あるいは姥山式に伴う粗製土器と考えられる。39は小型の深鉢で、炉の覆土から出土した。40は石錐で、西側の入口施設の覆土から出土した。基部が入念に加工されており、形状は有茎錐に近い尖基錐である。材質は茨城県北部産と考えられるメノウで、横長剥片を素材として表裏には押圧剥離が施されている。側縁はやや鋸歯状となる。長さ2.3cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm、重量1.28gである。

出土土器の主体となる時期は晩期前葉であり、遺構の時期も晩期前葉に位置付けられる。



第7図 SI001 (1)



第8図 SI001 (2)

2 土坑

SK001(第9図、図版3・9)

2B-18グリッドに位置する。耕作により格子状の擾乱を受けている。平面形は直径73cmの円形で、検出面から底面までの深さは21.2cmである。覆土は極暗褐色土で ϕ 5mm~1cmローム粒・炭化物粒を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。擾乱が激しく遺物の時期に幅があるため造構の時期判断が困難だが、後期後葉と考えられる。

SK008(第9図、図版4・9・14)

3A-75グリッドに位置する。造構検出時は一つの造構と思われたが、調査を進めると3基の土坑とSH051が重複していることが判明し、土坑には整理作業でA~Cの枝番号を付した。平面形は3基とも梢円形である。検出面から底面までの深さはAが34.8cm、Bが55.5cmで、CはBとSH051に切られていて壁と底面はほぼ残っていない。A~CおよびSH051の新旧関係は不明である。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒・ ϕ 1cmロームブロック・炭化物粒を少量、粘土粒を微量含む。遺物は縄文土器片がやや多く出土した。A~Cの遺物は全てSK008として取りあげ、Aの底面でSH051を認識した段階でSH051の遺物を分けて取りあげた。1は堀之内式、4は安行1式の深鉢の口縁部だが混入と考えられる。2は小片だが加曾利B式の深鉢胴部で、縄文地文に横位沈線と縦方向の蛇行沈線が施される。10は加曾利B式~曾谷式の異形台付土器の破片である。11は粗製深鉢の底部で、外面は丹念にミガキが施されている。12は土器片を転用した小型の円盤である。遺物は加曾利B3式~曾谷式が主体となり、造構の時期もこの時期に位置付けられる。土器のほかに骨片がわずかに出土した。

SK010(第10図、図版4・9)

3A-93グリッドに位置し、平面形は直径62cmの円形である。検出面から底面までの深さは22.4cmである。SH009と重複しており、検出面での切り合い関係からSH009より新しいと考えられる。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~2mmローム粒・ ϕ 1cmロームブロックを少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。1は条線が施された粗製深鉢である。造構の時期を決定できる資料が少ないが、図示した遺物から後期中葉~後葉と考えられる。

SK011(第10図、図版5・9)

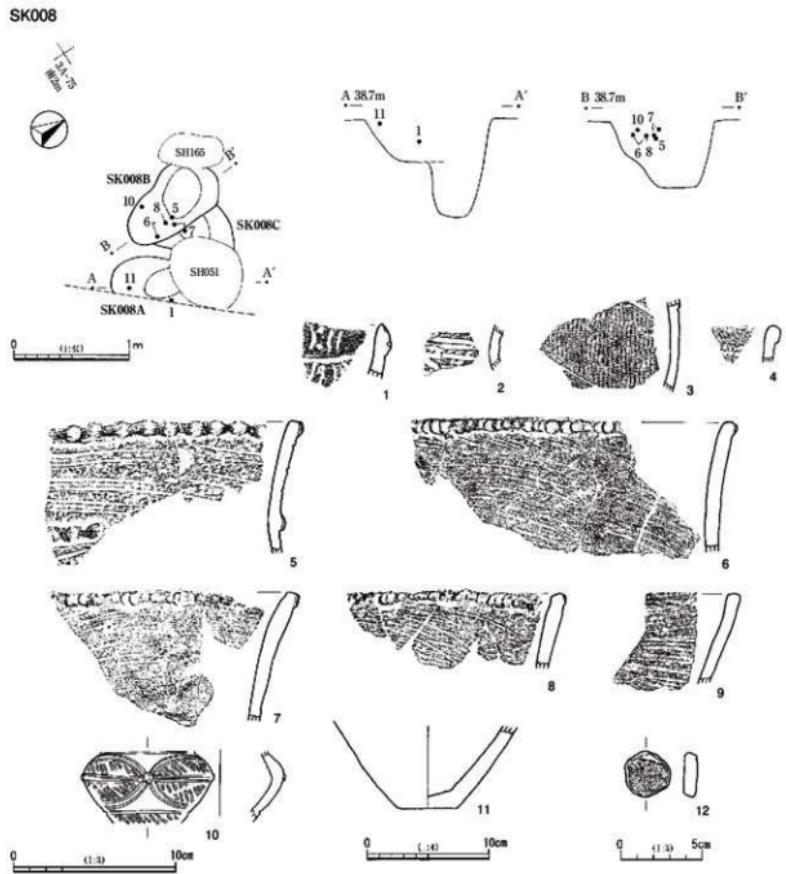
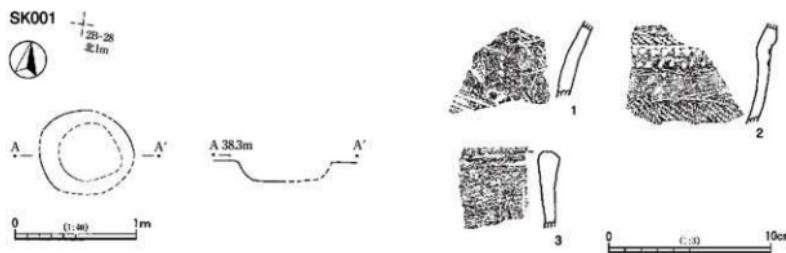
3A-93グリッドに位置する。北側は根による擾乱を受けている。平面形は直径69cmのはば円形で、検出面から底面までの深さは22.5cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1cm~3cmロームブロックを多量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。3は安行1式~2式の粗製深鉢胴部で、薄い縦線文が下方に垂れ下がるものである。図示した遺物から、造構の時期は後期後葉と考えられる。

SK013(第10図、図版5・9)

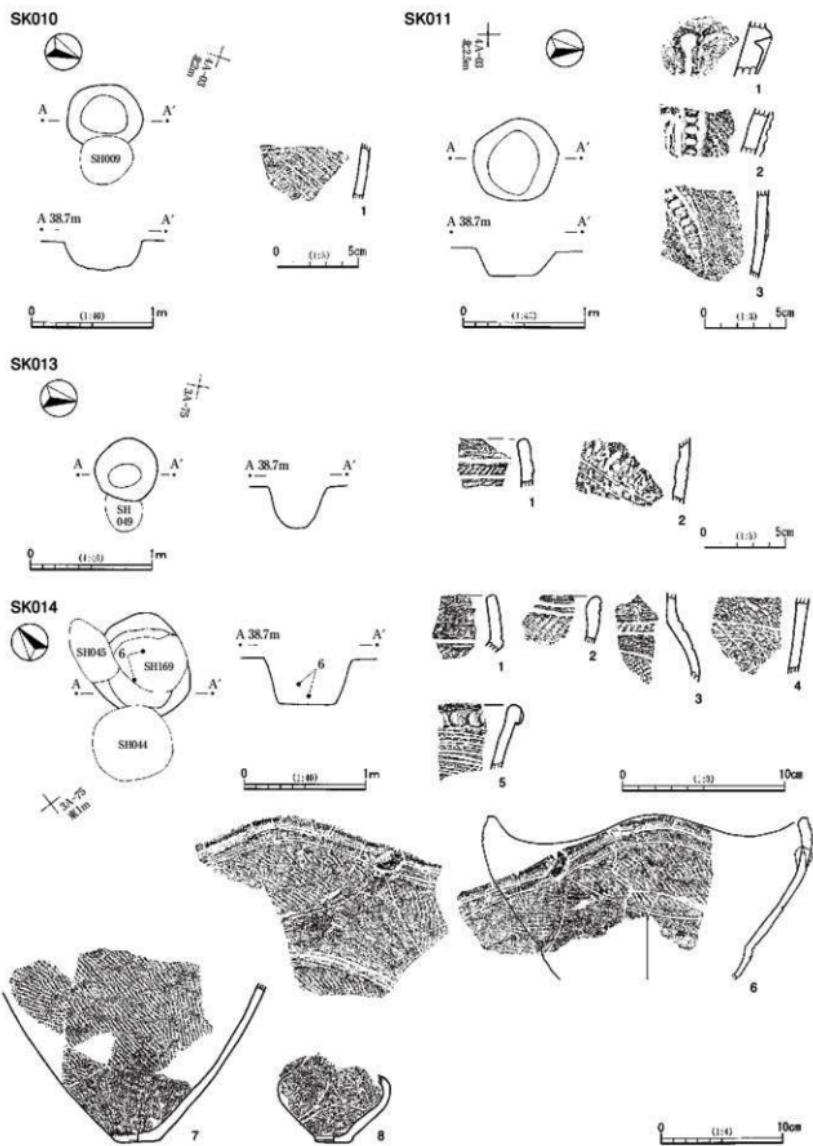
3A-75グリッドに位置し、平面形は直径50cmの円形である。検出面から底面までの深さは34.9cmである。SH049と重複しているが新旧関係は不明である。覆土は暗褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒多量、炭化物粒・焼土粒を少量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。1は加曾利B1式、2は加曾利B2式~加曾利B3式と考えられる。造構の時期を決定できる資料が少ないが、加曾利B2式期~加曾利B3式期と考えられる。

SK014(第10図、図版5・9・14)

3A-65グリッドに位置し、平面形は直径80cmの円形である。検出面から底面までの深さは36.9cmである。SH044、SH045、SH169と重複する。検出面での切り合い関係から、SK014はSH169より新しく、SH044、



第9図 SK001・SK008



第10図 SK010・SK011・SK013・SK014

SH045との新旧関係は不明である。覆土は黒褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 3\text{ mm}$ ローム粒・ $\phi 1\text{ cm} \sim 2\text{ cm}$ ロームブロック・焼土粒を微量、 $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ 炭化物粒をやや多量含む。遺物は縄文土器片がやや多く出土した。3・6・8は曾谷式と考えられる。遺物は加曾利B2式～加曾利B3式が混在するが主体は曾谷式と考えられ、遺構の時期も曾谷式期と考えられる。土器のほかに骨片がわずかに出土した。

SK015・SK040・SH047(第11図、図版5・10・14)

3A-75グリッドに位置し、3基の土坑が重複する。SH047はピットとして遺構番号を付したが形状から土坑と判断した。セクションから判断してSH047が最も新しくSK040が最も古い。

SK015は平面形が直径77cmの円形で、検出面から底面までの深さは28.4cmである。遺物は縄文土器片がやや多く出土した。遺物は加曾利B3式が主体と考えられるが、2・3・7などは曾谷式に含まれる。土器のほかに骨片がわずかに出土した。

SK040はSH047の完掘時に底面が検出され、SH047とは別の遺構と判断した。SH047とした遺物の一部はSK040に伴う可能性がある。

SH047は平面形が直径62cmの円形で、検出面から底面までの深さは36.6cmである。遺物は縄文土器片と、比較的遺存状況の良い深鉢の底部が出土した。遺物の時期に幅があるが、大型の破片資料から判断すると曾谷式期～安行1式期と考えられる。

SK016(第12図、図版5・10)

3A-28グリッドに位置し、平面形は直径105cmの円形である。検出面から底面までの深さは15.6cmである。SH054と重複し、検出面での切り合い関係からSH054より古いと判断される。覆土は暗褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ ローム粒を少量、 $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ 炭化物粒・焼土粒を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。1は称名寺式、2～4は堀之内式と考えられ、遺構の時期は堀之内式期と考えられる。

SK017(第12図、図版10)

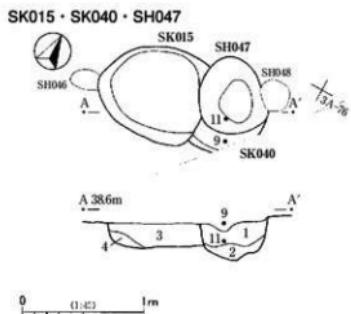
3A-29グリッドに位置し、平面形は直径90cmの円形である。検出面から底面までの深さは10.2cmである。覆土は黒褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ ローム粒を少量、 $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ 炭化物粒・焼土粒・骨粉を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。4は加曾利B式の粗製深鉢の胴部である。称名寺式～加曾利B式土器が混在しているが、遺構の時期は加曾利B式期と考えられる。土器のほかに、骨片がわずかに出土した。うち1点は人間の左下顎第二あるいは第三大臼歯である。

SK018(第12図、図版6・10)

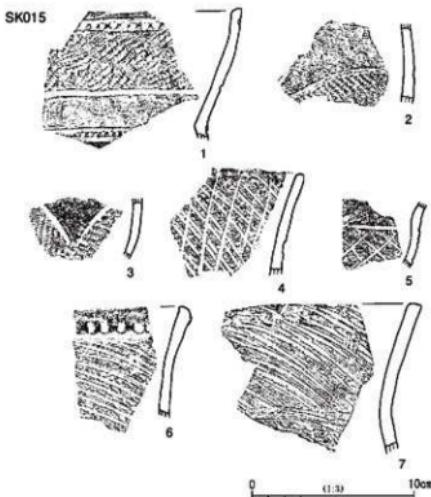
3B-10グリッドに位置し、平面形は直径51cmの円形である。検出面から底面までの深さは32.0cmである。覆土は黒褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ ローム粒・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。堀之内式の深鉢が主体で、遺構の時期も堀之内式期と考えられる。土器のほかに骨片が少量出土した。

SK019(第13図、図版10)

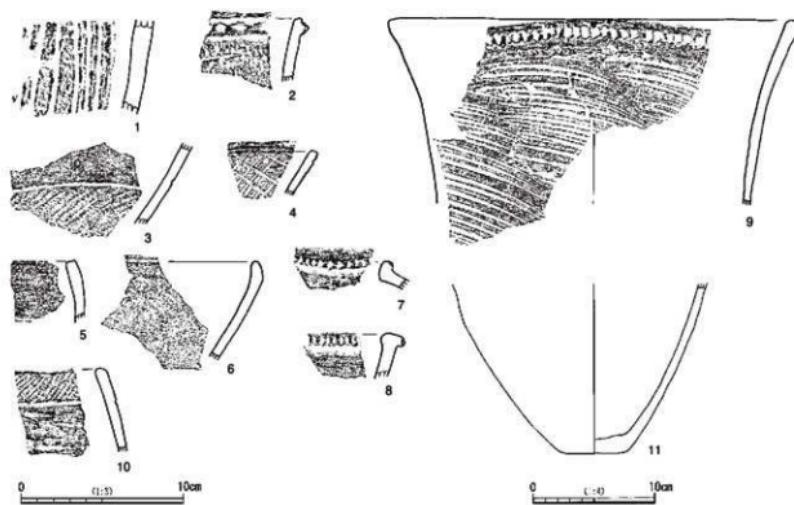
3A-29グリッドに位置し、平面形は長軸52cm、短軸33cmの楕円形である。検出面から底面までの深さは37.0cmである。覆土は黒褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 5\text{ mm}$ ローム粒を多量、 $\phi 1\text{ cm}$ 炭化物を少量、焼土粒を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。1・2の加曾利E式の深鉢は混入と見られ、3から遺構の時期は加曾利B式期と考えられる。



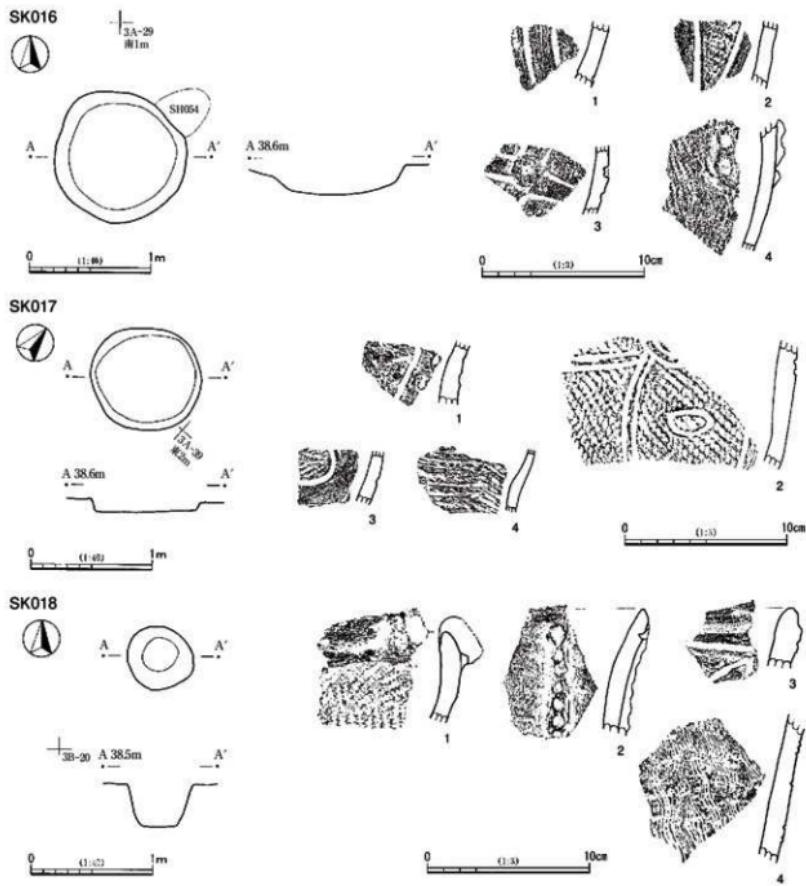
- SK015・SH047
- 1 黒褐色土 しまりやや弱 ローム粒少量、焼土粒微量
φ 1 ~ 7mm炭化物粒やや多
 - 2 褐色土 しまりやや弱 ローム粒主体
 - 3 黒褐色土 しまりやや弱 ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量
φ 1cmロームブロック少量
 - 4 黑褐色土 しまりやや弱 ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量
φ 1 ~ 3cmロームブロック多量



SH047



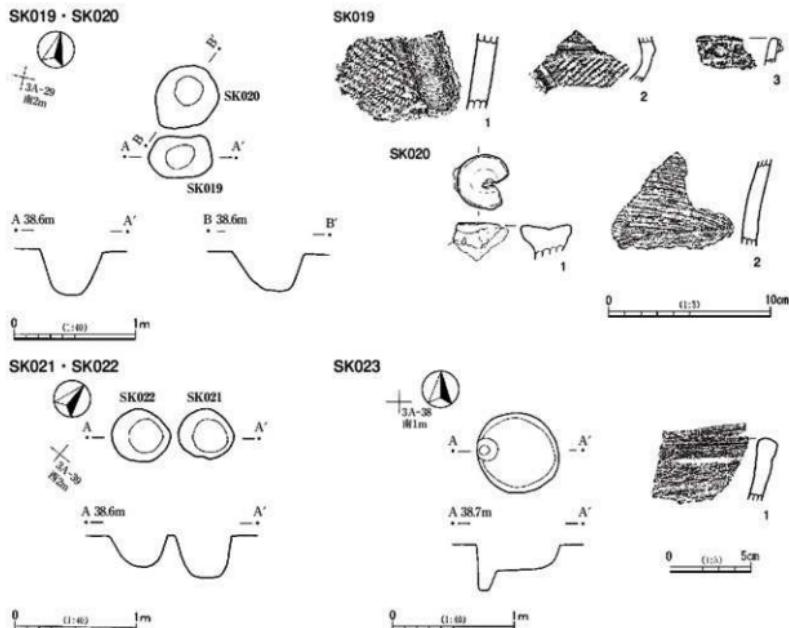
第11図 SK015・SK040・SH047



第12図 SK016・SK017・SK018

SK020(第13図、図版10)

3A-29グリッドに位置し、平面形は直径54cmの円形である。検出面から底面までの深さは30.9cmである。覆土は暗褐色土で ϕ 1mm～2mmローム粒を多量、 ϕ 1cmロームブロック・ ϕ 1mm～7mm炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。遺物は縄文土器片が微量出土した。遺構の時期を決定できる資料が少ないが、図示した資料から後期後葉と考えられる。



第13図 SK019・SK020・SK021・SK022・SK023

SK021(第13図)

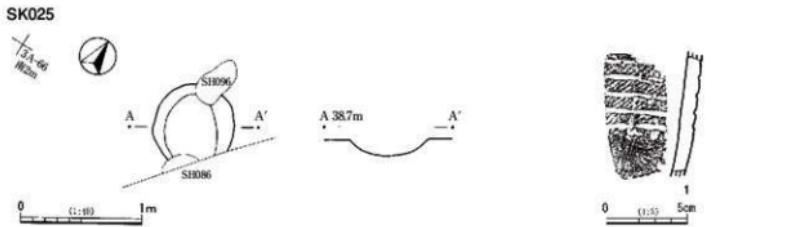
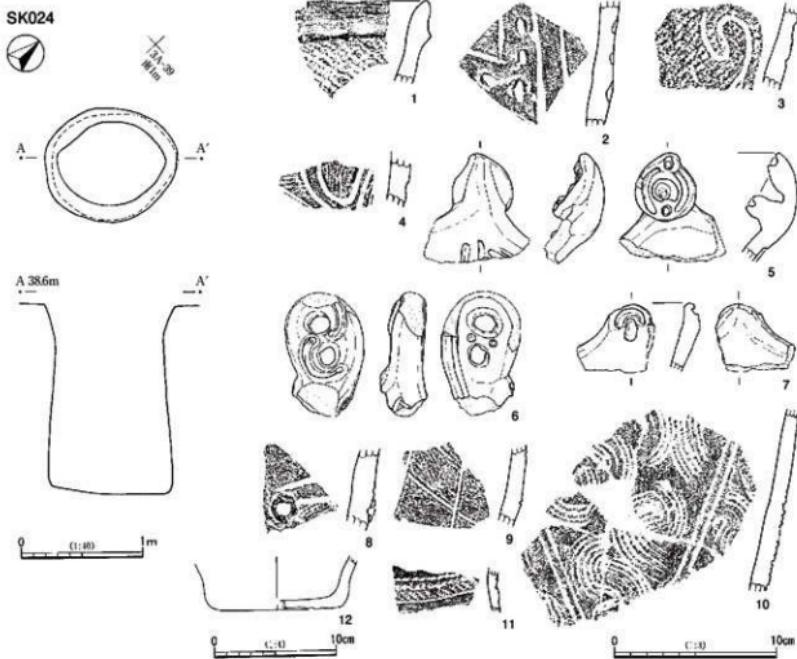
3A-28グリッドに位置し、平面形は直径44cmの円形である。検出面から底面までの深さは34.8cmである。覆土は暗褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 2\text{ mm}$ ローム粒を多量、 $\phi 1\text{ cm}$ ロームブロック・ $\phi 1\text{ mm} \sim 7\text{ mm}$ 炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。遺物は出土していない。

SK022(第13図)

3A-28グリッドに位置し、平面形は直径49cmの円形である。検出面から底面までの深さは26.0cmである。遺物は繩文土器片が微量出土し、図示できる遺物は無かった。覆土は暗褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 2\text{ mm}$ ローム粒を多量、 $\phi 1\text{ cm}$ ロームブロック・ $\phi 1\text{ mm} \sim 7\text{ mm}$ 炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。

SK023(第13図、図版6・10)

3A-38グリッドに位置し、平面形は直径70cmの円形である。検出面から底面までの深さは21.6cmである。西側の壁ぎわに小ピットがあり、土坑底面からの深さは15.0cmである。覆土は黒褐色土で $\phi 1\text{ mm} \sim 2\text{ mm}$ ローム粒を多量、 $\phi 1\text{ cm}$ ロームブロックを少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。遺物は繩文土器片が少量出土した。遺構の時期を決定できる資料が少ないが、図示した資料から安行1式期～安行2式期と考えられる。



第14図 SK024・SK025

SK024(第14図、第2表、図版6・10・14)

3A-39グリッドに位置し、検出面の平面形は長軸110cm、短軸90cmの楕円形で、底面は長軸104cm、短軸87cmの楕円形である。検出面から底面までの深さは158.0cmと深く、断面は上部がやくびれた円筒状をしている。壁面は凸凹が顕著である。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm～5mmローム粒・炭化物粒・焼土粒をやや多量、 ϕ 1cmロームブロックを少量含み、底面に10cmほど砂が堆積する。検出面から約40cmの深さで、小

規模なブロック状の貝層が検出された。検出した貝層は全量(水洗前体積0.9ℓ)を採取し、9.5mm、4mm、2mm、1mmのフリイを用いて水洗選別を行った。分析の結果、貝類5種、魚類3種が同定された。この他にキセルガイ科を主体とする陸産貝類、哺乳類の四肢骨と思われる焼骨の破片が数点確認された。貝類は外洋砂底性のダンベイキサゴ、チョウセンハマグリ、内湾性のハマグリが主体である(第2表)。チョウセンハマグリかハマグリか同定不可能な資料が13点検出されているが、地域的な傾向としてはチョウセンハマグリが優占する。魚類は9.5mm資料からスズキ属腹椎、ウナギ属尾椎、1mm資料からコイ科尾椎が1点ずつ検出された。栗山川水系の周辺遺跡と比較して、貝類・魚類とともに調和的な内容である。

貝層以外の遺物は縄文土器片がやや多く出土した。称名寺式と堀之内式の資料が混在しているため遺構の時期の決定が難しいが後期中葉の時期と考えられる。

SK025(第14図、図版6・10)

3A-66グリッドに位置し、平面形は直径65cmの円形である。検出面から底面までの深さは15.3cmである。SH086と重複しており、検出面での切り合い関係からSH086より古いと判断した。覆土は黒褐色土でφ1mm～5mmローム粒を少量、φ1mm～7mm炭化物粒・焼土粒をやや多く含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。遺構の時期は、図示した資料から加曾利B1式期～加曾利B2式期と考えられる。

SK026(第15図、図版6・10・14)

3A-65グリッドに位置し、平面形は直径123cmの円形である。検出面から底面までの深さは51.9cmである。覆土は暗褐色土でφ1mm～5mmローム粒を少量、炭化物粒・焼土粒を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。中央部の底面よりやや上で廃棄されたとみられる土器の破片がまとまって出土した。1は加曾利E式の深鉢だが混入とみられ、主体となるのは加曾利B3式であり、遺構もこの時期と考えられる。土器のほかに骨片がわずかに出土した。

SK028(第15図、図版6・10)

3A-65グリッドに位置し、平面形は梢円形である。検出面から底面までの深さは8.6cmである。SK026とSH162の間に位置し、北東側は搅乱によって切られている。SH156、SH162、SH166、SH167と重複しており、検出面での切り合い関係からSH162より古いが、ほかのピットとの新旧関係は不明である。覆土は黒褐色土でφ1mm～5mmローム粒・炭化物粒・粘土粒を少量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。土師器と須恵器の小片もごく微量出土したが搅乱による混入と判断し、縄文時代の土坑とした。主体となるのは加曾利B2式～加曾利B3式であり、遺構もこの時期と考えられる。土器のほかに骨片がわずかに出土した。

SK029(第15図、図版6・10)

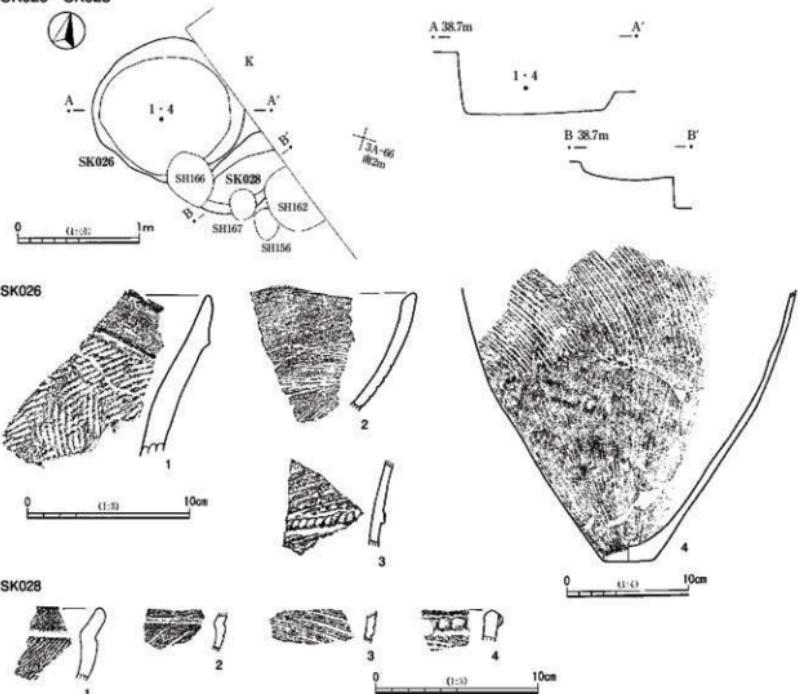
3A-48グリッドに位置し、平面形は直径101cmの円形である。検出面から底面までの深さは66.5cmである。覆土は黒褐色土でφ1mm～5mmローム粒を多量、φ1cm～3cmロームブロック・φ1mm～7mm炭化物粒を少量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。図示した遺物はいずれも称名寺式の深鉢で、遺構もこの時期と考えられる。

第2表 SK024出土貝類集計結果

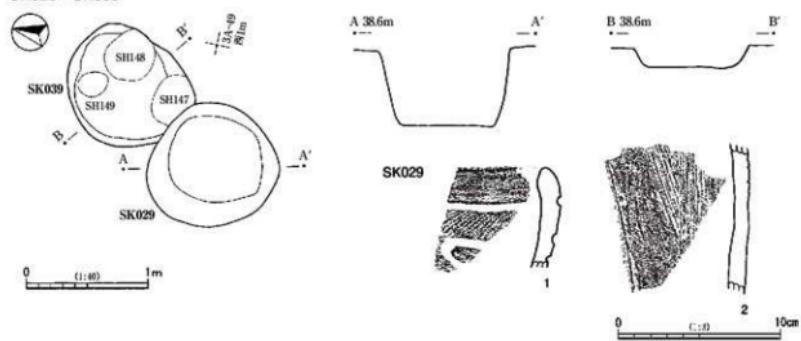
*9.5mmと4mmから出土したものと合算。
2mm以下の資料は出土していない。

種名	NISP	MNI
ダンベイキサゴ	8	8
マガキ	4	2
アサリ	1	1
チョウセンハマグリ	4	3
ハマグリ	3	2
チョウセンハマグリ/ハマグリ	13	7
NISP: 同定資料数		
MNI: 最小個体数		

SK026・SK028



SK029・SK039



第15図 SK026・SK028・SK029・SK039

SK030(第16図、図版7・11)

3A-56グリッドに位置し、平面形は直径85cmの円形である。検出面から底面までの深さは15.4cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cm~3cmロームブロック・ ϕ 1cm炭化物を少量、焼土粒・骨粉を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。加曾利B式から安行1式~安行2式と考えられる遺物が混在しているが、遺構の時期は安行1式期~安行2式期と考えられる。

SK031(第16図、図版7・11)

3A-65グリッドに位置し、北西側は調査区外となる。平面形は直径62cmの円形で、検出面から底面までの深さは78.1cmである。底面の中央にピットがあり、底面からの深さは15.0cmである。覆土は暗褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を少量、炭化物粒・焼土粒・骨粉を微量含み、底面に粘土混じりの黒色土が薄く堆積する。遺物は縄文土器片が少量出土した。遺構の時期は、3から安行1式期と考えられる。

SK032(第16図、図版11)

3A-65グリッドに位置する。攪乱により北東側の壁の一部が残るのみだが、平面形は梢円形とみられる。検出された最深部までの深さは16.2cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cmロームブロック・ ϕ 1cm炭化物を少量、焼土粒・骨粉を微量含む。遺物は縄文土器片が微量出土した。時期を決定できる資料が少ないが、図示した遺物から加曾利B1式期と考えられる。

SK033(第16図、図版7・11)

3A-57グリッドに位置し、平面形は直径70cmの円形である。検出面から底面までの深さは28.4cmである。底面のやや南寄りに小ピットがあり、底面からの深さは8.4cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cm炭化物を少量、焼土粒を微量含み、底面に黒色土が薄く堆積する。遺物は縄文土器片が少量出土した。時期を決定できる資料が少ないが、図示した遺物から堀之内式期と考えられる。

SK034(第16図、図版7・11)

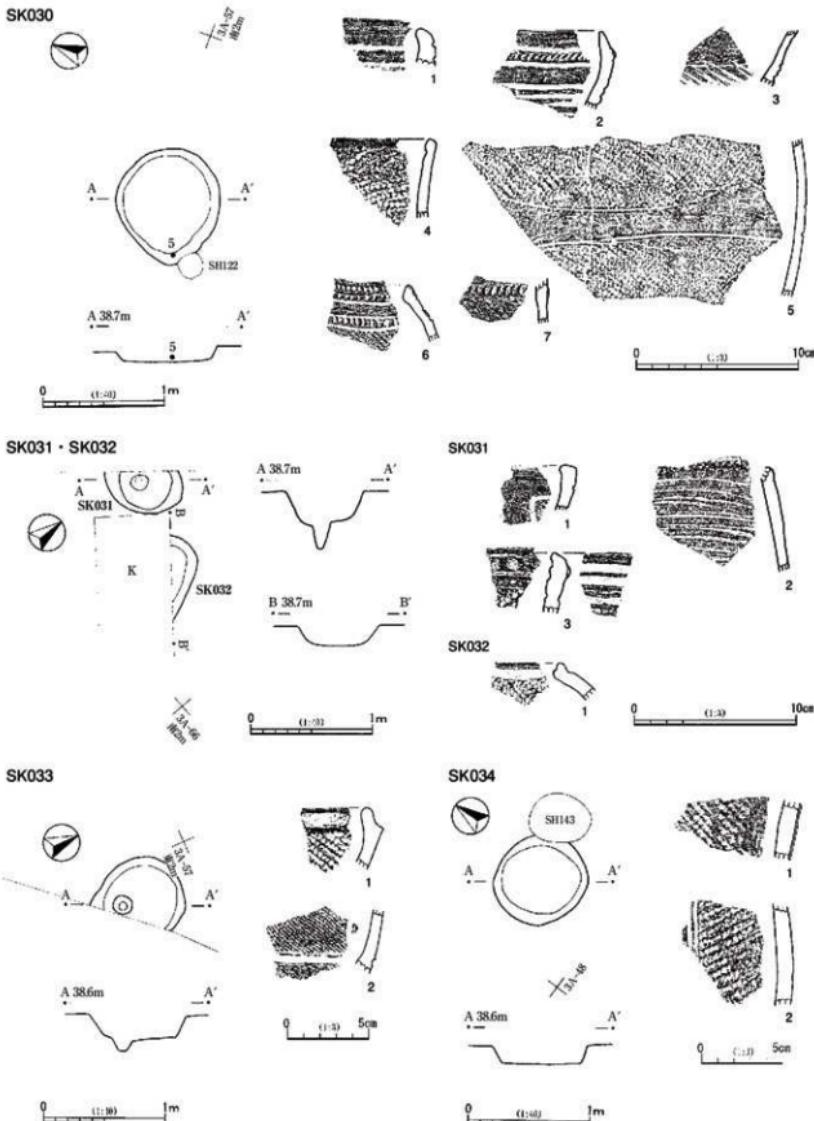
3A-38グリッドに位置し、平面形は直径76cmの円形である。検出面から底面までの深さは17.3cmである。SH143と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は暗褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cm炭化物を少量、焼土粒を微量含む。遺物は縄文土器片が微量出土した。遺構の時期は図示した遺物から堀之内式期と考えられる。

SK035(第17図、図版7・11)

3A-56グリッドに位置し、平面形は直径74cmの円形である。北西部分の一部は調査区外となる。検出面から底面までの深さは79.8cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cm~3cmロームブロック・ ϕ 1cm炭化物を少量、焼土粒・骨粉を微量含む。遺物は縄文土器片が多く出土した。12・13は土器片を転用した円盤で、12は縄文施文部分の一部に赤彩が施されており、内面にもわずかに赤彩が残る。土器のほかに骨片がわずかに出土した。遺物の時期に幅があるが、9~11の曾谷式~安行1式の精製深鉢から、遺構の時期は後期後葉と考えられる。

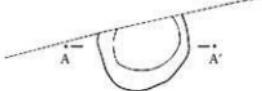
SK036(第17図、図版7・11)

4A-03グリッドに位置する。南東部分は調査区外で南西部分がSB001のP1に切られているが、直径68cm程の円形とみられる。検出面から底面までの深さは31.0cmである。覆土は暗褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cmロームブロックを微量含む。遺物は縄文土器片が微量出土した。時期を決定できる資料が少ないが、図示した遺物から加曾利B1式期と考えられる。

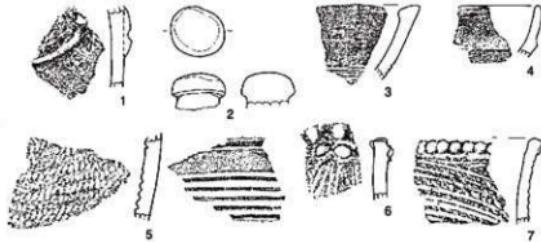


第16図 SK030・SK031・SK032・SK033・SK034

SK035

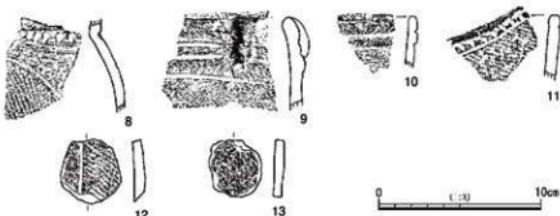


0 (1:40) 1m

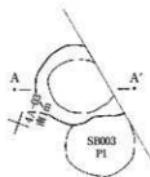


A 38.7m

A'



SK036



0 (1:40) 1m



SK038



A 38.1m

A'

0 (1:40) 1m



第17図 SK035・SK036・SK038

SK038(第17図、図版7・11)

2B-74グリッドに位置する。半分は調査区外で南東部分のみ検出された。平面形は直径80cmの円形とみられ、検出面から底面までの深さは50.0cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm～5mmローム粒を多量、 ϕ 1cm～5cmロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。遺物は縄文土器片が少量出土した。遺構の時期を決定できる資料が少ないが、1の堀之内式の深鉢は混入とみられ、2から加曾利B1式期～加曾利B2式期と考えられる。

SK039(第15図)

3A-38グリッドに位置し、平面形は直径105cmのやや歪な円形である。検出面から底面までの深さは19.5cmである。SH147、SH148、SH149と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は黒褐色土で ϕ 1mm~5mmローム粒を多量、 ϕ 1cm~3cmロームブロック・ ϕ 1mm~7mm炭化物粒を少量、骨粉を微量含む。遺物は出土していない。覆土が他の縄文時代の土坑と類似することから縄文時代の土坑と判断した。

3 ピット群（第18~21図、第3表、図版2・11・12・14）

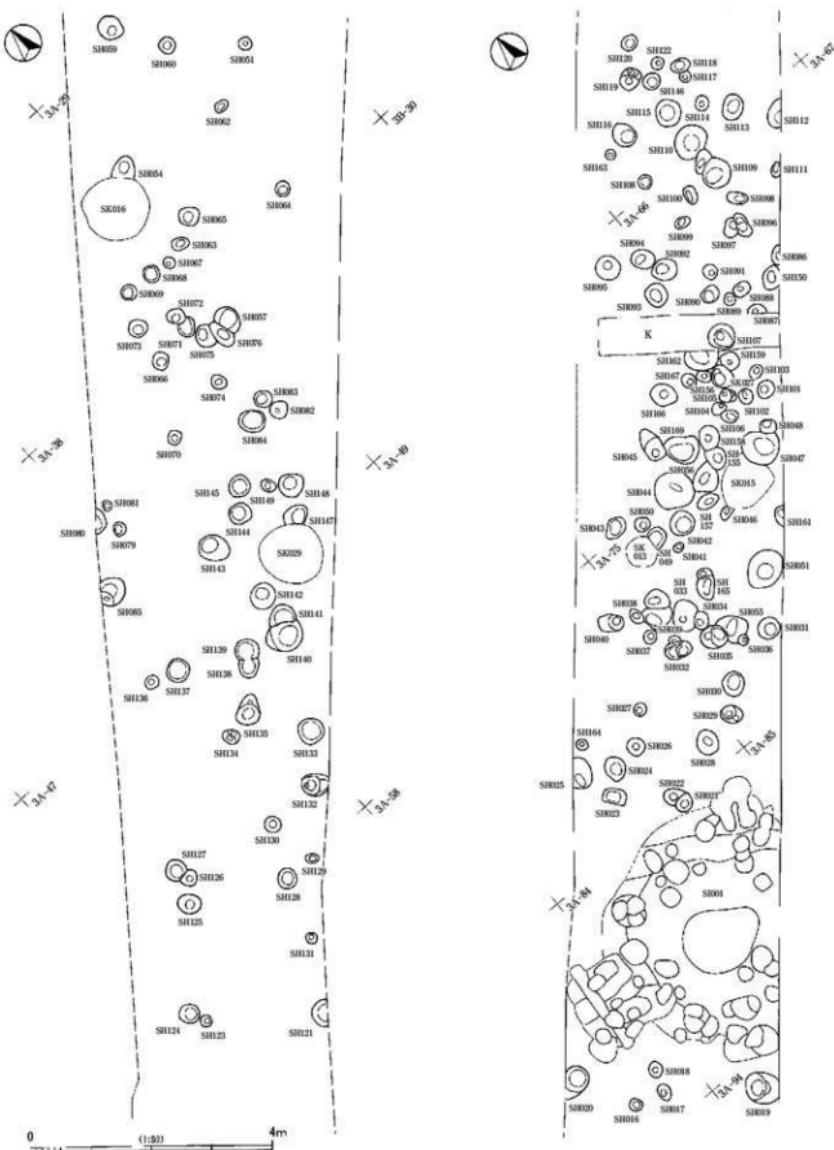
調査区南西側から中央付近にかけて、直径や深さが多様なピットが多数検出された。ピットの分布状況は第18・19図に示し、個々のピットの規模・覆土等については第3表に掲載した。覆土や出土遺物の状況から概ね縄文時代の堅穴住居跡や土坑と同時期の後期中葉～後期後葉に属するピットであると考えられるが、堅穴住居跡に伴うか跡や壁と認識できる遺構はSI001以外に検出されず、ピット自体にも配置の規則性が見出せなかつたため、個々の性格は不明である。図示できた遺物は第20・21図に遺構番号順に掲載し、遺物番号の下に出土した遺構番号を記載した。個々のピットから出土した遺物は大半が縄文土器で、少量かつ小片であり、時期を決定できるものは少なかった。

1は土器の形状から粗製深鉢の胴部下半と考えられる。2・3は精製深鉢である。1~3は安行1式~安行2式と考えられる。4は台付浅鉢で、胴下部に横位沈線と縄文が施文される。加曾利B式あるいは曾谷式と考えられる。5は堀之内1式の深鉢と考えられる。6・7は称名寺式の深鉢と考えられる。8は安行1式~安行2式の精製深鉢と考えられる。9は深鉢の破片で後期に位置付けられると考えられるが詳細な時期は不明である。10は加曾利B1式の精製深鉢の口縁部である。11は無文の精製深鉢あるいは浅鉢の口縁部である。12は瓢形を呈する精製深鉢の胴部である。13は粗製の深鉢胴部で縄文地文に条線が施される。11~13はいずれも加曾利B2式~加曾利B3式と考えられる。14は口縁部に紐線文が貼付けられる粗製深鉢で、加曾利B1式~加曾利B2式と考えられる。15は加曾利B3式と考えられる精製深鉢である。16は堀之内1式と考えられる粗製深鉢である。17は加曾利B1式の粗製深鉢と考えられる。18は加曾利B2式~加曾利B3式と考えられる精製深鉢の口縁部である。19・20は小片で時期の決定が難しいが、堀之内式と考えられる精製深鉢の口縁部で、19は内面の口縁部下に沈線が巡る。21は土器片を転用した円盤で、加曾利B式と考えられる。22・23は加曾利B3式と考えられる精製深鉢である。24は加曾利B2式と考えられる粗製深鉢である。25は安行1式~安行2式と考えられる粗製深鉢の口縁部である。26は加曾利B2式と考えられる粗製深鉢である。27は土器片を転用した円盤である。28は加曾利B2式と考えられる精製深鉢である。29は浅鉢で内外面は丹念にミガキが施されている。加曾利B2式と考えられる。30・31は精製深鉢、32・33は粗製深鉢で、30~33は加曾利B3式と考えられる。34は綾杉文が施される精製深鉢胴部で、加曾利B2式~加曾利B3式と考えられる。35は加曾利B3式~曾谷式と考えられる精製深鉢胴部である。36・37は加曾利B2式~加曾利B3式と考えられる粗製深鉢である。38は底部が箱型を呈す土器の底部の角の部分で、縄文地文に、各辺に沿って2条の沈線が引かれる。39は深鉢の底面に網代痕が残るものである。40は土器片を転用した円盤である。38~40は後期後葉と考えられる。41は堀之内2式と考えられる深鉢である。42・43は堀之内式と考えられる深鉢の口縁部である。44~46はいずれも加曾利B1式~加曾利B2式と考えられる深鉢である。47は42と類似する個体で、刺突列の下に横位沈線が引かれ、その下に縦方向の沈線が引かれる。堀之内式と考えられる。48は称名寺式と考えられる深鉢である。49・50はいずれも堀之内式と考えられる深鉢である。51は堀之内2式と考えられる深鉢あるいは鉢の胴部である。52は堀之内1

式と考えられる深鉢である。53は堀之内式、54は称名寺式と考えられる深鉢胴部である。55は堀之内式と考えられる深鉢の口縁部である。56は堀之内式と考えられる深鉢の口縁部である。57は加曾利B式と考えられる深鉢胴部である。58は加曾利E式と考えられる深鉢胴部である。59は加曾利B2式～加曾利B3式と考えられる精製深鉢の口縁部である。60は加曾利B1式と考えられる精製深鉢である。61は波状口縁深鉢の口縁部で、波頂部に沈線を伴う隆帯が渦巻き状に貼付けられる。62は胴部で長楕円形の刺突が施される。61・62はいずれも称名寺式と考えられる。63は加曾利B1式～加曾利B2式と考えられる粗製深鉢である。64・65は精製深鉢の口縁部で、加曾利B2式～加曾利B3式と考えられる。66・67は粗製深鉢で、66は加曾利B2式～加曾利B3式、67は加曾利B1式と考えられる。68は加曾利B2式と考えられる粗製深鉢である。69は加曾利B3式と考えられる精製深鉢である。70は堀之内1式と考えられる深鉢である。71は67と似た個体で、縄文地文に笠状工具による太い斜線が施されるものである。加曾利B1式と考えられる。72は称名寺式と考えられる深鉢胴部である。73～75は深鉢胴部で、いずれも堀之内1式と考えられる。76は加曾利E式と考えられる深鉢の口縁部である。77は堀之内式と考えられる深鉢胴部である。78～81は堀之内式と考えられる深鉢の口縁部で、81の表面は丹念にミガキが施されている。82・83は加曾利B2式～加曾利B3式と考えられる精製深鉢あるいは浅鉢で、綾杉文とみられる斜行沈線が施される。84は加曾利B3式～曾谷式と考えられる精製深鉢の胴部である。85は注口土器の胴部と思われる破片で、密な横位沈線区画の間に縄文が施される。加曾利B1式と考えられる。86～90は堀之内1式と考えられる深鉢である。91は加曾利B3式～曾谷式と考えられる粗製深鉢である。92は堀之内1式と考えられる深鉢である。93は後期後葉と考えられる精製深鉢の胴部である。94は堀之内1式と考えられる深鉢である。95・96は加曾利B3式と考えられる精製深鉢である。

4 遺物包含層（第19図、図版8）

4A-02・11・12・21グリッドを主体に位置する。遺跡が立地する台地の西側には南北方向に谷津が入り込んでおり、調査範囲の南西側は谷津に向かって緩やかに傾斜している。調査時に表土を除去していくところ、褐色土中から遺物が比較的多く検出されたため、遺物包含層として調査を行った。遺物は4m×4mの小グリッドごとに取り上げを行った。遺物が包含されているのは主に褐色土中で、その上の黒色土にもやや遺物が含まれていた。色調が異なる2つの層において遺物の時期差は認められず、いずれも縄文時代後期中葉～晩期初頭の遺物が主体で、わずかに縄文時代中期の遺物が混在している。遺物は縄文土器片が主体のほか、石器が出土している。包含層出土遺物は4A-02・11・12・21グリッド出土遺物として第3節に掲載した。各グリッドから検出された遺物の総量は、4A-02が1,563g、4A-11が1,620g、4A-12が782g、4A-21が549gである。



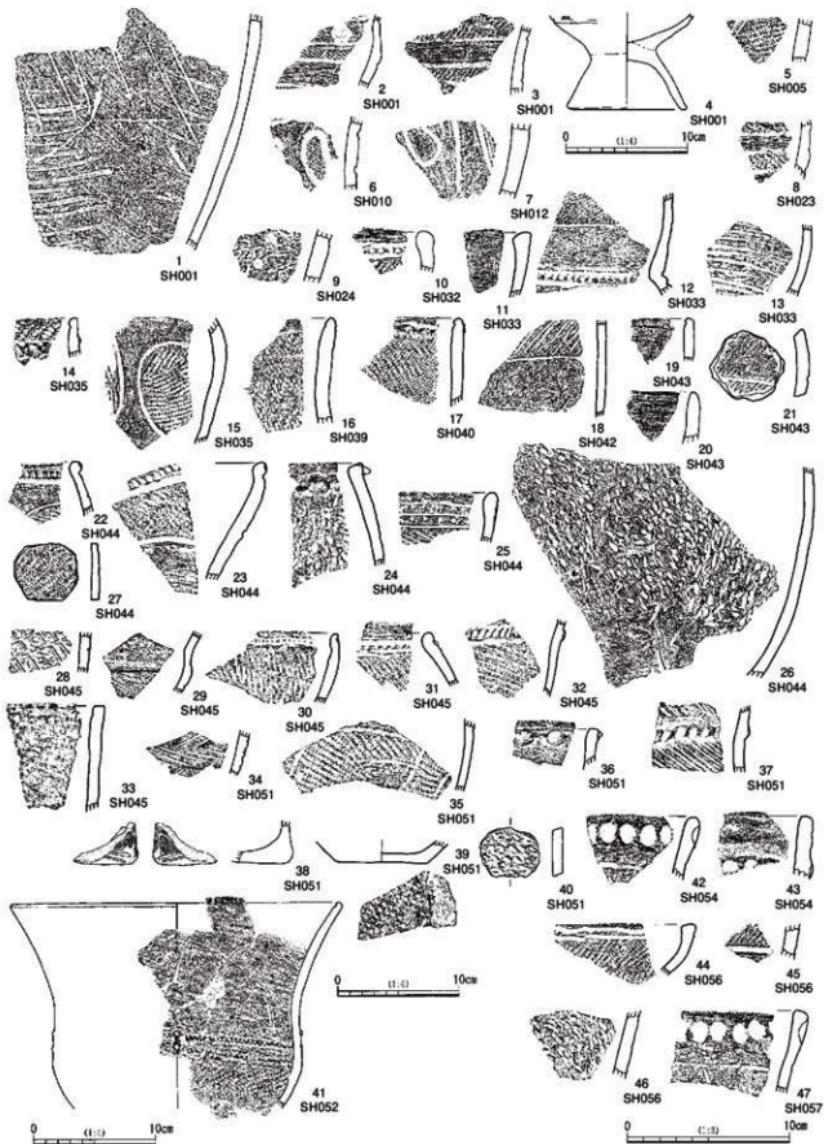
第18図 ピット群（1）



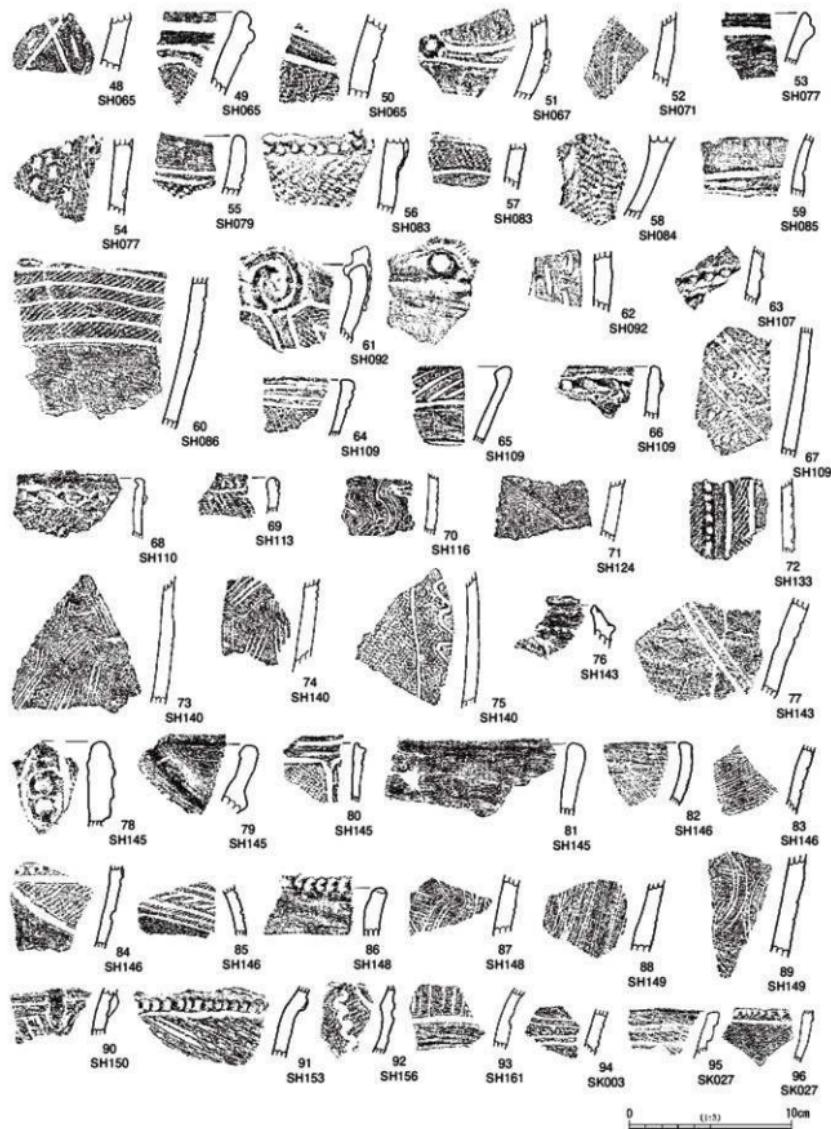
第19図 ピット群（2）・遺物含有層

第3表 ピット一覧

遺構番号	グリッド	直径(cm)	深さ(cm)	遺物	覆土
SH001	2C-00	35	25	縄文土器	黒褐色土
SH002	2B-27	45	45	縄文土器	黒褐色土
SH003				矢番	
SH004	4A-02	24	19	縄文土器	黒褐色土
SH005	4A-03	45	67	縄文土器	黒褐色土
SH006	3A-93	24	16	縄文土器	黒褐色土
SH007	3A-93	27	22	縄文土器	黒褐色土
SH008	3A-93	34	23	縄文土器	黒褐色土
SH009	3A-93	45	40	縄文土器	黒褐色土
SH010	3A-93	30	38	縄文土器	黒褐色土
SH011				矢番	
SH012	3A-93	28	31	縄文土器	黒褐色土
SH013	3A-93	54	34	縄文土器	黒褐色土
SH014	3A-93	40	25	縄文土器	黒褐色土
SH015	3A-93	20	38	縄文土器	黒褐色土
SH016	3A-93	20	24	縄文土器	黒褐色土
SH017	3A-93	27	33	縄文土器	黒褐色土
SH018	3A-93	27	35	縄文土器	黒褐色土
SH019	3A-94	62	91	縄文土器	黒褐色土
SH020	3A-93	43	31	縄文土器・土師器	黒褐色土
SH021	3A-84	32	41	縄文土器	黒褐色土
SH022	3A-74	38	30	縄文土器	黒褐色土
SH023	3A-74	40	25	縄文土器	黒褐色土
SH024	3A-74	40	95	縄文土器	黒褐色土
SH025	3A-74	50	70	縄文土器	黒褐色土
SH026	3A-74	30	25	縄文土器	黒褐色土
SH027	3A-74	23	11	縄文土器	黒褐色土
SH028	3A-74	40	24	縄文土器	黒褐色土
SH029	3A-75	35	44	縄文土器	黒褐色土
SH030	3A-75	37	85	縄文土器	黒褐色土
SH031	3A-75	28	81	縄文土器	黒褐色土
SH032	3A-75	45	86	縄文土器	黒褐色土
SH033	3A-75	52	43	縄文土器	黒褐色土
SH034	3A-75	30	67	縄文土器	黒褐色土
SH035	3A-75	45	66	縄文土器	黒褐色土
SH036	3A-75	15	29	縄文土器	黒褐色土
SH037	3A-75	24	14	縄文土器	黒褐色土
SH038	3A-75	30	43	縄文土器	黒褐色土
SH039	3A-75	65	36	縄文土器	黒褐色土
SH040	3A-74	43	60	縄文土器	黒褐色土
SH041	3A-75	15	12	縄文土器	黒褐色土
SH042	3A-75	41	17	縄文土器・土師器	黒褐色土
SH043	3A-45	42	85	縄文土器	黒褐色土
SH044	3A-75	65	77	縄文土器	黒褐色土
SH045	3A-45	127	28	縄文土器	黒褐色土
SH046	3A-75	24	24	縄文土器	黒褐色土
SH048	3A-75	27	30	縄文土器	黒褐色土
SH049	3A-75	38	12	縄文土器	黒褐色土
SH050	3A-75	24	15	縄文土器	黒褐色土
SH051	3A-75	68	81	縄文土器	黒褐色土
SH052	3A-83	40	64	縄文土器・土師器	黒褐色土
SH054	3A-29	37	43	縄文土器	黒褐色土
SH055	3A-75	70	25	縄文土器	黒褐色土
SH056	3A-75	50	29	縄文土器	黒褐色土
SH057	3A-19	30	46	縄文土器	黒褐色土
SH058	3A-19	30	37	縄文土器	黒褐色土
SH059	3A-29	45	28	縄文土器・土師器	黒褐色土
SH060	3A-29	36	16	縄文土器	黒褐色土
SH061	3A-29	11	11	縄文土器	黒褐色土
SH062	3A-29	25	36	縄文土器	黒褐色土
SH063	3A-29	30	12	縄文土器	黒褐色土
SH064	3A-29	25	18	縄文土器	黒褐色土
SH065	3A-29	36	30	縄文土器	黒褐色土
SH066	3A-38	30	31	縄文土器	黒褐色土
SH067	3A-28	20	43	縄文土器	黒褐色土
SH068	3A-28	28	25	縄文土器	黒褐色土
SH069	3A-28	25	14	縄文土器	黒褐色土
SH070	3A-38	23	9	縄文土器	黒褐色土
SH071	3A-38	30	47	縄文土器	黒褐色土
SH072	3A-38	30	22	縄文土器	黒褐色土
SH073	3A-28	30	23	縄文土器	黒褐色土
SH074	3A-38	27	21	縄文土器	黒褐色土
SH075	3A-38	40	27	縄文土器	黒褐色土
SH076	3A-38	49	22	縄文土器	黒褐色土
SH077	3A-38	46	36	縄文土器	黒褐色土
SH078				矢番	
SH079	3A-38	23	29	縄文土器	黒褐色土
SH080	3A-38	43	31	縄文土器	黒褐色土
SH081	3A-38	18	9	縄文土器	黒褐色土
SH082	3A-38	32	53	縄文土器	黒褐色土
SH083	3A-38	30	39	縄文土器	黒褐色土
SH084	3A-38	42	44	縄文土器	黒褐色土
SH085	3A-37	50	22	縄文土器	黒褐色土
SH086	3A-66	33	62	縄文土器	黒褐色土
SH087	3A-66	30	50	縄文土器	黒褐色土



第20図 ピット群出土遺物（1）



第21図 ピット群出土遺物（2）

第2節 古墳時代以降

1 堅穴住居跡

SI002(第22図、図版3・14)

2B-75・85・76グリッドに位置し、南東側は調査区外となる。平面形は方形と考えられ、北西壁の長さは3.4mである。カマドは北西壁に位置し、主軸方位はN-45°-Wである。表土から深さ約1mまで耕作等の擾乱を受けており、遺存する壁高は北西壁13.2cm、南西壁15.6cm、南東壁3.6cmである。床面は貼床で、カマド周辺は固く踏みしめられている。カマドは北西壁の中央に位置するが、擾乱によりほぼ削平され、両袖部の痕跡が少し残る程度である。柱穴は2基検出され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が36.3cm、P2が29.8cmである。周溝はカマドの左右から南西壁と北東壁に巡っており、全周するものと考えられる。遺構に伴う遺物は土師器の破片が少量出土した。1は土師器の杯で、内面口唇部下に浅く沈線が巡る。2・3は土師器の甕である。遺構の時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

SI003・SH057・SH058(第22図、図版3)

3A-19、3B-10グリッドに位置し、北西側は調査区外となる。壁と床面は検出されていないが、規則的に並ぶ4基の柱穴から土師器の破片が少量出土したため堅穴住居跡と判断した。平面形は方形で、主軸方位はN-45°-Wである。柱穴の深さはP1が17.7cm、P2が30.1cm、P3が26.0cm、P4が32.4cm、P5が17.0cmである。P1～P4は主柱穴、P5は入口の梯子ピットと考えられる。なお、P3とP4の中間にSH057が、P1の北西にSH058が位置しており、SI003の柱穴と規模・覆土が類似することから、この2つのピットもSI003あるいは重複する別の住居に伴う柱穴の可能性がある。P1～P4・SH058の覆土は黒褐色土でφ1mm～5mmローム粒・炭化物粒・焼土粒を多量、山砂を少量含む。P5・SH057の覆土は暗褐色土でφ1mm～5mmローム粒・φ1mm～7mm炭化物粒を少量、山砂・焼土粒を微量含む。柱穴内から土師器の破片が少量出土したが、図示できる遺物は無かった。古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

2 土坑

SK002(第23図、図版4)

3A-92グリッドに位置し、西側の壁部分は調査区外となる。平面形は直径64cmの円形で、検出面から底面までの深さは46.2cmである。土師器の破片が出土しているため古墳時代以降の土坑と判断した。遺物は縄文土器片が少量と土師器の小片がわずかに出土したが、図示できるものは無かった。古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

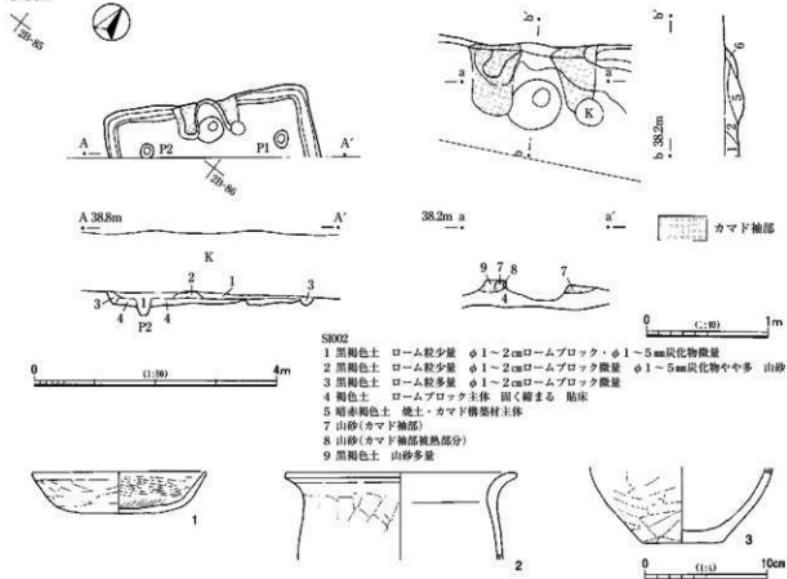
SK004(第23図、図版4)

4A-03グリッドに位置し、平面形は直径62cmの円形である。検出面から底面までの深さは48.2cmである。土師器の破片が出土しているため古墳時代以降の土坑と判断した。遺物は縄文土器および土師器の小片がわずかに出土したが、図示できるものは無かった。古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

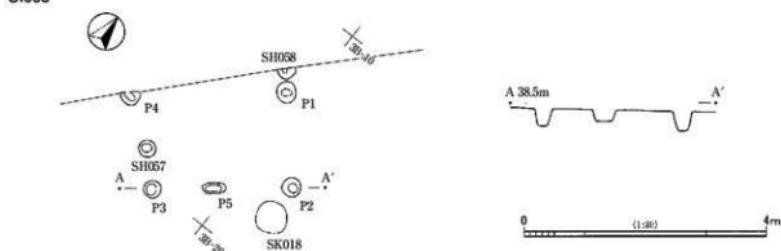
SK005(第23図、図版4)

3B-01グリッドに位置し、平面形は直径114cmの円形である。検出面から底面までの深さは30.7cmである。覆土はφ1cm～5cmのロームブロック主体で、しまりはやや弱い。ロームブロックを主体とする覆土の状況と遺構の形状から中・近世の土坑と判断した。遺物は縄文土器片のみが出土している。

SI002



SI003



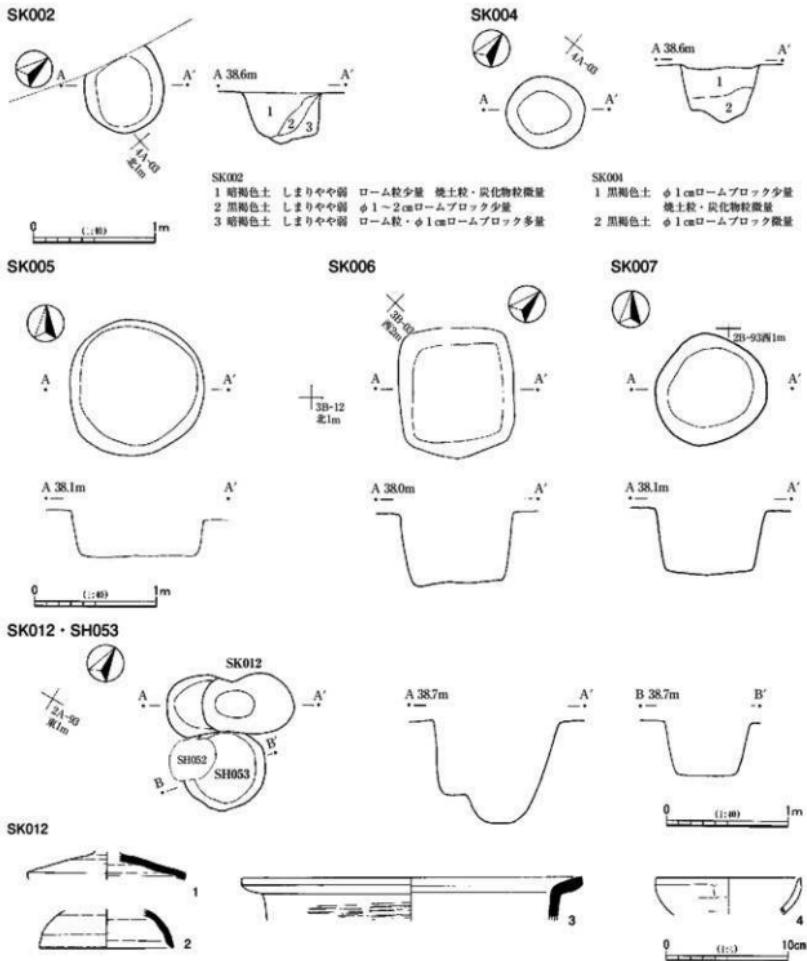
第22図 SI002・SI003

SK006(第23図、図版4)

3B-02グリッドに位置する。平面形は長軸100cm、短軸92cmの方形で、検出面から底面までの深さは60.0cmである。覆土はロームブロック主体で暗褐色土が混じり、しまりはやや弱い。ロームブロックを主体とする覆土の状況と造構の形状から中・近世の土坑と判断した。遺物は縄文土器片のみが出土している。

SK007(第23図、図版4)

2B-92グリッドに位置し、平面形は直径92cmの円形である。検出面から底面までの深さは55.1cmである。覆土は黒褐色土で $\phi 1\text{mm}\sim 5\text{mm}$ ローム粒・ $\phi 1\text{cm}\sim 2\text{cm}$ ロームブロックを少量含む。覆土の観察所見と遺



第23図 SK002 · SK004 · SK005 · SK006 · SK007 · SK012 · SH053

構の形状から、古墳時代以降の土坑と判断した。遺物は縄文土器片のみが出土している。古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

SK012(第23図、図版5)

3A-83グリッドに位置する。平面形は長軸105cm、短軸42cm、中央がやや括れた長楕円形で、検出面から底面までの深さは84.8cmである。覆土は黒褐色土で ϕ 1 mm~3 mmローム粒を微量、 ϕ 1 cm炭化物をやや

多く、焼土粒・ ϕ 1cm～2cmロームブロックを少量含む。遺物は縄文土器、土師器、須恵器の破片が少量出土した。1・2はロクロ整形による須恵器蓋で、1は外面に自然釉がわずかに残る。3は須恵器甕で外面にタキが施される。4は土師器の坏である。いずれも小片のため時期決定が難しいが、1は7世紀末～8世紀初頭、2は7世紀前半、3は8世紀代、4は7世紀後半と考えられ、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

SH053(第23図、図版5)

3A-83グリッドに位置し、平面形は直径68cmの円形である。検出面から底面までの深さは44.7cmである。ピットとして遺構番号を付したが、形状から土坑とし、土師器の破片が出土しているため古墳時代以降の土坑と判断した。覆土は暗褐色土で ϕ 1mm～5mmローム粒・ ϕ 1cm～3cmロームブロックを少量、 ϕ 1mm～7mm炭化物粒を微量含む。遺物は縄文土器、土師器の破片が少量出土したが、図示できるものは無かった。古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

3 挖立柱建物跡

SB001(第24図、図版8)

4A-11・21グリッドに位置する。南東側が調査区外であるため全体の規模は不明であるが、桁行3間で4.75m、梁行1間または2間と推定され、梁行の方位はN-42°-Wと推定される。各柱穴の平面形はほぼ同一で、直径60cm～68cmの円形である。P1～P4の各柱間隔は1.5m～1.6mでほぼ等間隔である。P1とP5の柱間隔は1.9m程度と推定される。なお、P1～P4の延長線上にSB003のP1～P3が位置しており、同一の規格の掘立柱建物が2棟並んでいたことが推測される。遺構に伴う遺物としては柱穴内から小型の土師器甕の破片が出土した。遺構の時期は古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられる。

SB002(第24図、図版8)

4A-11・12グリッドに位置する。3基のピットの規模と濃い黒色の覆土の特徴が共通することから掘立柱建物と判断した。南東側は調査区外となるため全体の規模は不明である。各柱穴の平面形は直径25cm～50cmの円形で、底面の直径はいずれも約20cmである。P1とP2の各柱間隔は3m、P2とP3の各柱間隔は2.5mで、P1-P2間のほうが若干広い。土師器の破片が出土しているため古墳時代以降の掘立柱建物跡と判断した。P1～P3の覆土はいずれも黒褐色土で ϕ 1mm～2mmローム粒を多量、 ϕ 1cm～3cmロームブロックを少量含み、しまりはやや弱い。遺構に伴う遺物としては柱穴内から土師器の破片が少量出土したが、図示できるものは無かった。古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられるが、詳細な時期は不明である。

SB003(第24図、図版7)

3A-93・4A-03グリッドに位置する。SB001のP1～P4の延長線上に並ぶ3基のピットである。大部分は調査区外となるため全体の規模は不明であるが、SB001の柱穴と規模・覆土の特徴が共通することからSB001と同様の掘立柱建物と考えられる。各柱間隔は1.5m前後で、主軸方向もSB001とほぼ同じと推測される。P1～P3の覆土はいずれも黒褐色土で ϕ 1cm～3cmロームブロックを少量含み、しまりはやや弱い。柱穴内から縄文土器、土師器の破片が少量出土したが、図示できる遺物は無かった。時期を決定できる遺物はないが、SB001とほぼ同時期と考えられる。

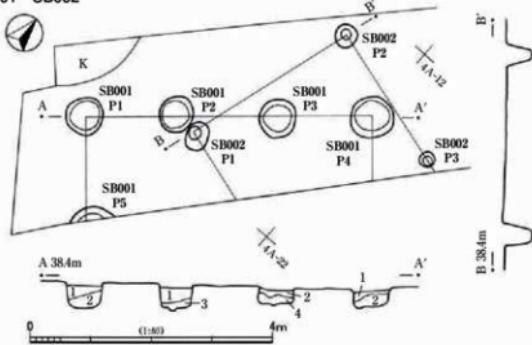
4 溝状遺構

SD001(第24図、図版2・14)

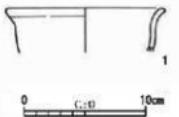
3A-84グリッドに位置し、SI001の北東側を切っている。北西-南東方向に伸び、上端の幅は52cm、検出

面からの深さは13.6cmである。底面はやや凹凸があり、断面形は浅いU字型である。土師器の破片が出土しており古墳時代以降の溝と判断した。覆土は黒褐色土で ϕ 1mmローム粒を微量、焼土粒・ ϕ 1mm~5mm炭化物粒を少量含む。図示できた遺物は1点で、ミニチュア土器である。古墳時代後期~奈良時代に属する遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SB001・SB002

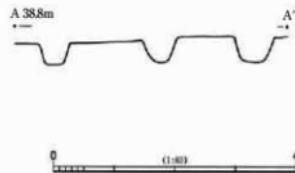
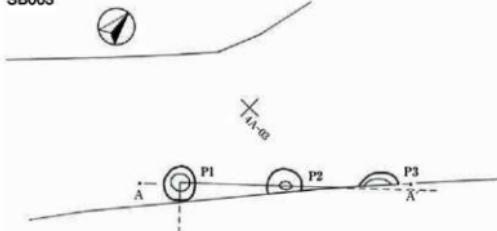


SB001

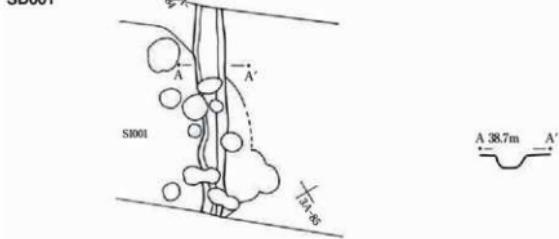


- SB001
 1 黒褐色土 しまりやや弱 ローム粒多量
 2 黒褐色土 しまりやや弱 ローム粒少量
 3 黒褐色土 しまりやや弱 焼土粒微量
 4 棕色土 ローム粒少量 炭化物粒微量

SB003



SD001



第24図 SB001・SB002・SB003・SD001

第3節 遺構外出土遺物

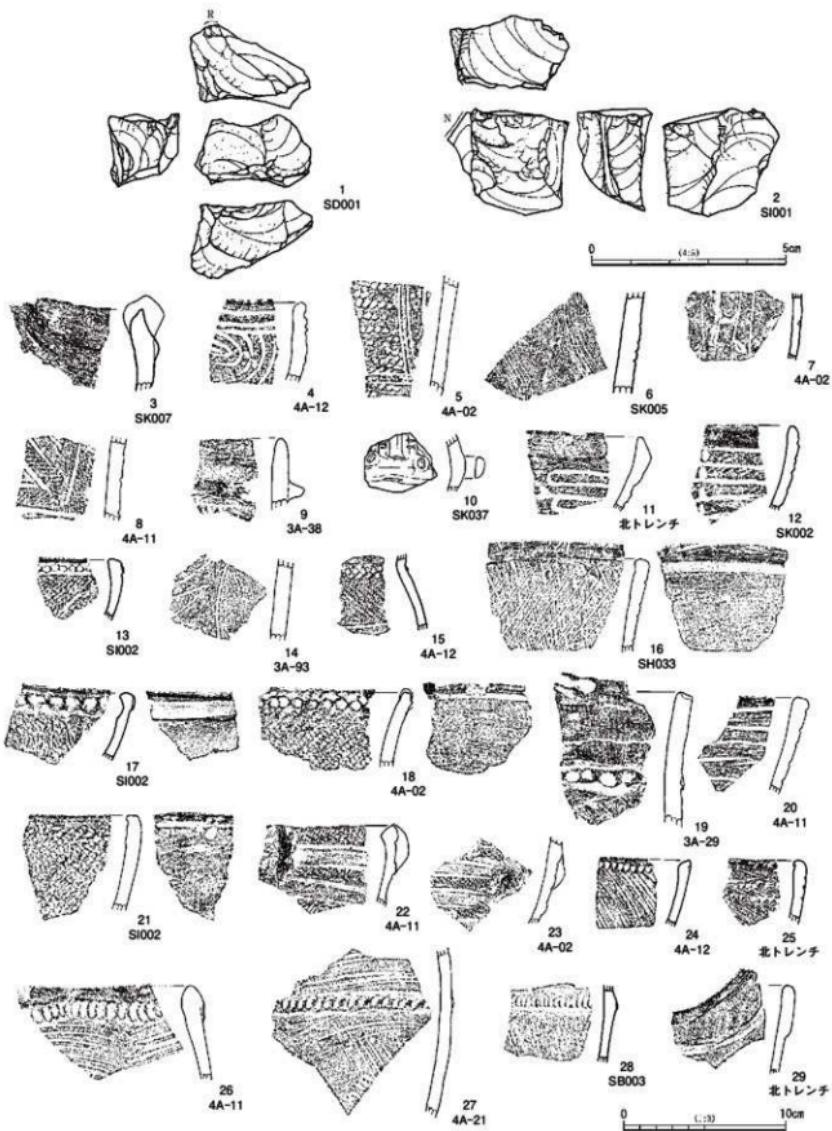
ここでは、表土除去作業中や遺構検出中に出土し帰属する遺構が明らかにならなかつたもの、および遺構覆土中から検出されたが遺構の時期に伴わないと判断した遺物について図示できたものを掲載する。それぞれの遺物が出土した位置はグリッド番号や遺構番号を遺物番号の下に記載した。北トレンチと表記したもののは、県道を挟んで北側の狭長の調査区において表土除去中に出土した遺物である。

旧石器時代遺物(第25図、図版12)

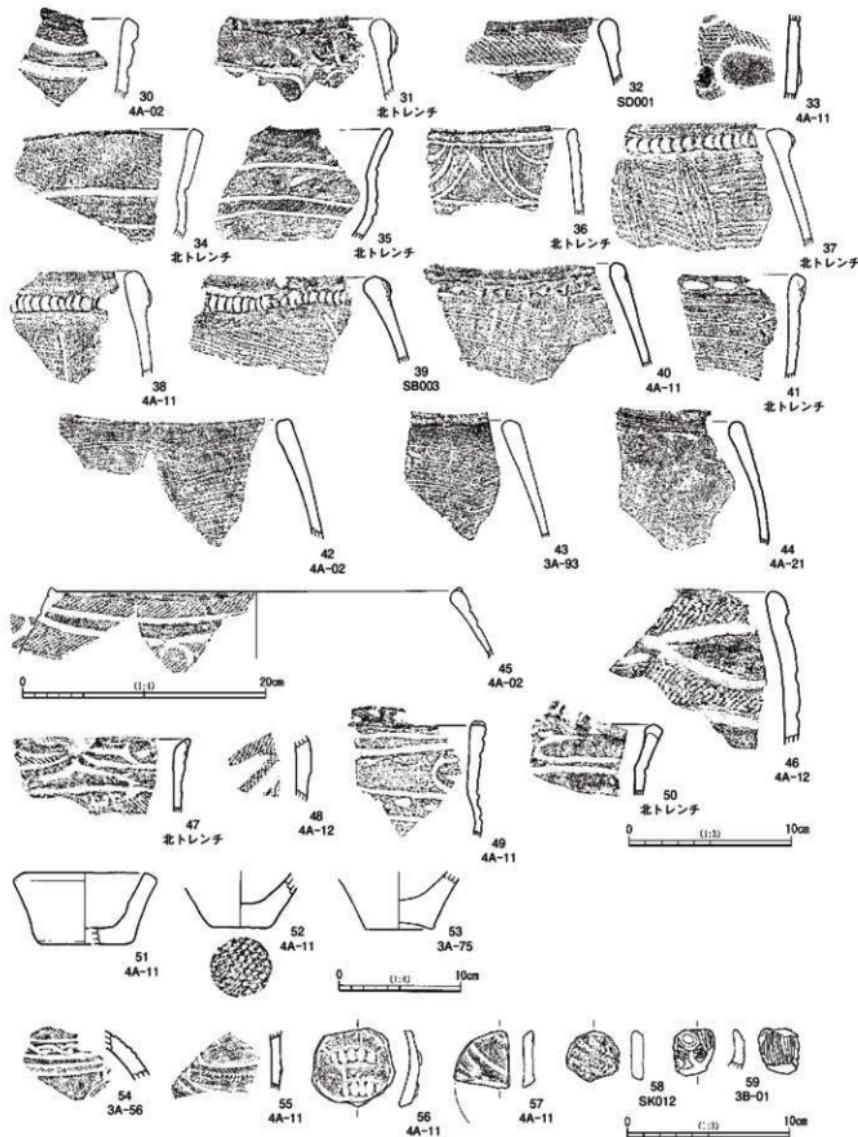
下層確認調査では旧石器時代の遺物は検出されなかつたが、SI001およびSD001の覆土中から旧石器時代とみられる石器が出土した。1はサイコロ状の石核で、材質は硬質頁岩である。実測図中のRで示した部分には二次調整が見られる。長さ1.8cm、幅2.9cm、厚さ2.1cm、重量8.59gである。2は厚手の剥片を素材としたサイコロ状の石核で、材質は珪質頁岩である。剥離面の状態から不定形の横長剥片が複数枚生産されたとみられる。実測図中のNで示した部分には原石の自然面が残る。長さ2.5cm、幅3.1cm、厚さ2.0cm、重量13.88gである。

縄文時代遺物(第25・26・27図、図版13)

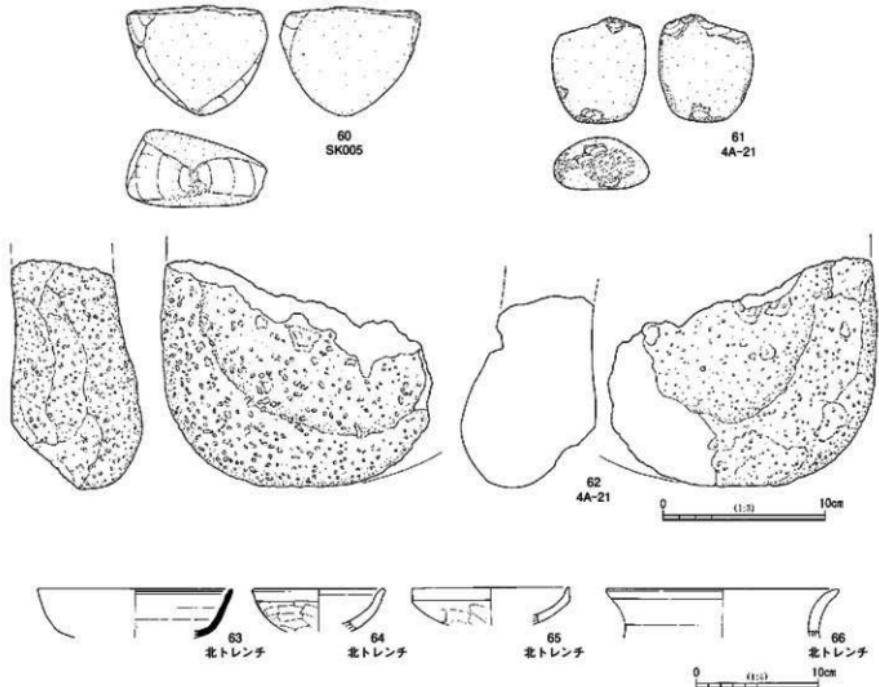
3は加曾利E式と考えられる深鉢の口縁部である。4~10は堀之内式と考えられる深鉢である。10は鉢の胴部に付く把手部分で、左右に竹管による刺突が施され、上方に向かって伸びる隆帯にはキザミが施される。11~16は加曾利B式と考えられる精製土器である。17~21は加曾利B式と考えられる粗製土器の口縁部である。19は頸部に指頭押捺による紐線文が貼り付けられ、その下に斜行条線が施される。口唇部の一部が突起状に伸び、突起の付け根部分の口唇部には円形刺突と沈線が施されると思われるが、欠損しているため全体像ははっきりしない。20は口縁部に横位の太い沈線が引かれ、内外面は丹念にミガキが施されている。22・23は安行1式~安行2式と考えられる精製深鉢で、いずれも沈線で区画された帶縄文が施され、縦長楕円形の貼付文が付けられる。24~28は安行1式~安行2式と考えられる粗製深鉢である。24は口縁部に細かい刺突列が巡る。25は口縁部に彫刻刀状の工具による刺突列が3段並ぶ。26~28は口縁が内傾する砲弾型を呈すものと考えられる。29~35は安行3a式~安行3b式と考えられる精製土器である。31は豚鼻状の貼付文が付けられ、その下は棹状文が施文される。33は棹状文の間に円形の薄い貼付文が付けられる。36は安行3b式~安行3c式と考えられる細密沈線が施された精製深鉢である。37~44は粗製深鉢で、41以外は口縁部が内傾する砲弾型を呈す。37~41は安行3a式~安行3b式、42~44は安行3c式あるいは姥山II式に伴うものと考えられる。45~48は前浦式の平口縁の深鉢である。45の口唇部には低い突起が貼り付けられる。49・50は安行3c式もしくは姥山II式の深鉢あるいは浅鉢で、内外面は丹念にミガキが施されている。51~53は深鉢の底部である。51は上部の破断面が磨滅しており、胴部が欠損した後に再加工が施されたとみられる。52の底面には網代痕が残る。54・55は注口土器の胴部とみられる破片で、54は加曾利B式、55は安行2式と考えられる。56~58は土器片を転用した円盤で、56・57は安行2式と考えられる。59は異形台付土器あるいは土偶の頭部の飾りとみられる土器片である。60~62は石器である。60は砂岩の磨石で遺存部分の長さ7.0cm、幅8.3cm、厚さ4.5cm、重量340.3gである。61は砂岩の敲石で、遺存部分の長さ6.3cm、幅5.7cm、厚さ3.3cm、重量170.6gである。62は多孔質安山岩の石皿で、表裏ともに磨面となる。遺存部分の長さ13.9cm、幅16.3cm、厚さ8.2cm、重量1,631.3gである。



第25図 造構外出土遺物（1）



第26図 遺構外出土遺物（2）



第27図 遺構外出土遺物（3）

古墳時代以降遺物(第27図、図版14)

検出された遺物は少なく、図示した遺物はいずれも破片である。63は須恵器の坏で、ロクロにより整形され、外面は磨滅している。口縁部はヨコナデで、内面口唇部下に浅く沈線が巡る。胎土には雲母がやや多く混じる。64・65は土師器の坏である。64は底部が丸底でやや厚みをもつ。口縁部はヨコナデ、内面はヨコナデ後に粗いミガキが施される。外面は横方向のヘラケズリが施される。65は口縁部ヨコナデ、内面はナデ、外面はヘラケズリが施される。66は土師器壺で口縁部にヨコナデ、内外面はヘラナデが施される。いずれも小片のため時期を決定するのが難しいが、63は8世紀前半、64・65は7世紀中葉、66は8世紀前葉～中葉と考えられる。

第3章 総括

今回の調査では、縄文時代後期中葉～晚期前葉の遺構群と、それに伴う遺物が検出された。特に縄文時代晚期前葉に位置付けられる竪穴住居跡は、宮郷台遺跡の周辺地域では初めてとなる貴重な検出例となつた。また、古墳時代後期～奈良時代の集落に伴うと考えられる遺構が今回調査でも確認され、台地の南西側の縁辺部における古代の集落の広がりを確認することができた。本章では、改めて宮郷台遺跡から検出された遺構・遺物についてまとめる。

縄文時代

今回の調査範囲内から検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑31基、ピット群、および縄文時代後・晚期の遺物包含層である。遺構は調査区の南西側から中央部にかけての範囲に集中しており、調査区の北東側における分布は希薄である。出土した遺物は土器が主体を占め、時期としては中期後葉から晚期中葉までの遺物が検出されたが、中期後葉～後期前葉および晚期中葉の資料はわずかであり、主体となるのは後期中葉から晚期前葉である。

SI001は、入口施設を伴ういわゆる柄鏡形住居と呼ばれる竪穴住居跡である。入口施設を除く直径は約3.5mと小規模であるが、竪穴の規模に対してやや大型の入口施設と炉を伴っている。また、主柱穴と考えられる複数の柱穴が炉を中心とした同心円上に配置されている。遺構の一部が調査範囲外のため推測の域を出ないが、P1～P3は4本柱構造、P5、P6、P14は5本あるいは6本柱構造を成すと考えられ、平面プランの規模をほとんど変えずに何度も建替えが行われたと考えられる。検出された炉の焼土範囲が竪穴の規模に対して広いのも、複数回の建替えを繰り返し、長期間使用された結果であると考えられる。SI001に伴う2つの入口施設は規模に明らかな違いが見られるが、検出された遺物等からは明確な時期差を見出すことは困難であった。しかし、主柱穴および炉との位置関係と規模を考慮すると、住居の最終段階まで使用されていたのが西側の入口施設Aであり、入口施設Bはより古い段階のものであると推測される。SI001からは縄文時代後期中葉から晚期前葉までの遺物が検出された。その中でも主体となる時期は晚期前葉で、最も新しい遺物から判断すると姥山II式段階まで継続していたものと考えられる。

縄文時代の土坑は、時期を決定するのが困難なものも含まれるが、竪穴住居の時期よりも古い後期中葉～後期後葉のものが主体となる。SK024は称名寺式～堀之内式の遺物が出土している円筒形の深い土坑で、覆土中から小規模な貝ブロックが検出された。このような断面が円筒形で貝層を伴う深い土坑は、千葉県においては縄文時代後期に入ると特徴的に見られるようになり、機能は貯蔵穴などが想定されているものの、いま明らかにされてはいない。

調査範囲の南西側から中央付近にかけて検出された多数のピットについては、調査範囲の制約がありピットの広がりが把握できない部分が多かった。これらのピット群の中には、上面の攢乱により痕跡や壁が失われ、竪穴住居跡として認識できなかったものも含まれている可能性がある。

遺物包含層は、台地の西側の谷津に向かう緩やかな傾斜面に台地上の集落の遺物が流れ込んだことにより形成されたものと考えられ、集中的に遺物が廃棄されたような痕跡は見られなかつた。

第1章でも述べたように、今回の調査区の東側では主要地方道成田松尾線の建設や店舗建設等に伴う発掘調査が行われており、縄文時代後・晚期の人々による生活の痕跡は確認されていたものの、いずれの調

査でも明確な遺構は検出されていなかった。よって、今回の調査で当該期の集落跡が検出されたことは、宮郷台遺跡が縄文時代後期から晩期にまで及ぶ人々の生活拠点であったことを示す重要な成果である。

古墳時代以降

今回の調査では、古墳時代後期～奈良時代に属すると考えられる堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡3棟、土坑5基、溝状遺構1条が検出され、それ以外に中・近世と考えられる土坑が2基検出された。

堅穴住居跡はいずれも遺存状況が悪く、調査範囲の制約も受けたため限定的な調査となった。SI002は辛うじてカマドが検出でき、遺物の時期から7世紀末～8世紀初頭に位置付けられる。

掘立柱建物跡は調査範囲の制限があり全容の把握が困難であったが、調査区の南西端で3棟検出された。SB001とSB003は主軸方向を同じくし、柱穴の形態も共通することから、同規模の掘立柱建物が並立していたと推定される。SB002は柱穴の直径がSB001・SB003に比べて小さく、主軸方向も異なる。SB001・SB003とSB002は異なる時期のものと考えられるが、いずれの掘立柱建物跡も出土資料に乏しく、新旧関係を明らかにすることは困難であった。

本遺跡における過去の調査では、小池新林遺跡および三田遺跡として調査された南側の台地において、古墳時代中期に属する堅穴住居跡が14軒、古墳時代後期に属する堅穴住居跡が103軒検出されている。また、小池地蔵遺跡、小池地蔵II遺跡として調査された範囲を含む、今回の調査範囲の北東側で行われた調査では、古墳時代後期の堅穴住居跡が41軒検出されている。奈良・平安時代については、宮郷台遺跡全体で、奈良時代の堅穴住居跡が8軒、平安時代の堅穴住居跡が3軒検出されており、掘立柱建物跡は奈良時代以降と考えられるものが8棟検出されている^(注1)。

これらの調査成果から、集落の出現期は古墳時代中期で、後期になると集落の規模が拡大し、奈良時代以降は規模が縮小するものの平安時代まで継続したと考えられる。このような状況を踏まえて今回の調査成果を概観すると、SI002は集落が大規模化する古墳時代後期に位置付けられる堅穴住居跡であり、遺構の分布密度は薄いものの、当該期の集落が台地の南西側の縁辺まで広がっていたことを示すものである。また、SI003や掘立柱建物跡も、出土遺物からは遺構の帰属時期が特定できないものの、古墳時代後期から奈良時代にかけて台地上に展開した集落に帰属する遺構であると捉えることが可能であろう。

注1) 遺構の時期と数は、下記報告書等を参考に集計した。

(財)千葉県文化財センター 1985「小池新林遺跡・小池地蔵遺跡」「主要地方道成田松尾線II」

芝山町教育委員会 1989「千葉県山武郡芝山町三田遺跡発掘調査報告書」

芝山町教育委員会 1998「宮郷台遺跡(地蔵873-1地点)」「平成9年度芝山町内遺跡発掘調査報告書」

(財)千葉県文化財センター 1991「芝山町小池地蔵II遺跡」「主要地方道成田松尾線VI」

(財)千葉県文化財センター 1992「芝山町御田台遺跡・小池新林遺跡」「主要地方道成田松尾線VII」

(財)山武郡市文化財センター 1996「財團法人山武郡市文化財センター年報11」

芝山町教育委員会 1999「宮郷台遺跡(新林932-1地点)」「平成10年度芝山町内遺跡発掘調査報告書」

(財)千葉県教育振興財团 2012「古墳時代中期の房総～中期の要素の波及とその評価～」「研究紀要27」

(公財)千葉県教育振興財团 2021「山武郡芝山町宮郷台遺跡発掘調査報告」「千葉県教育振興財团文化財センター年報No.46～令和2年度～」

写 真 図 版



図版2



造構配置状況（南西側）



SI001・SD001



SI001 (西から)



SI001 (北東から)



SI001遺物出土状況



SI001炉跡



SI002



SI002カマド

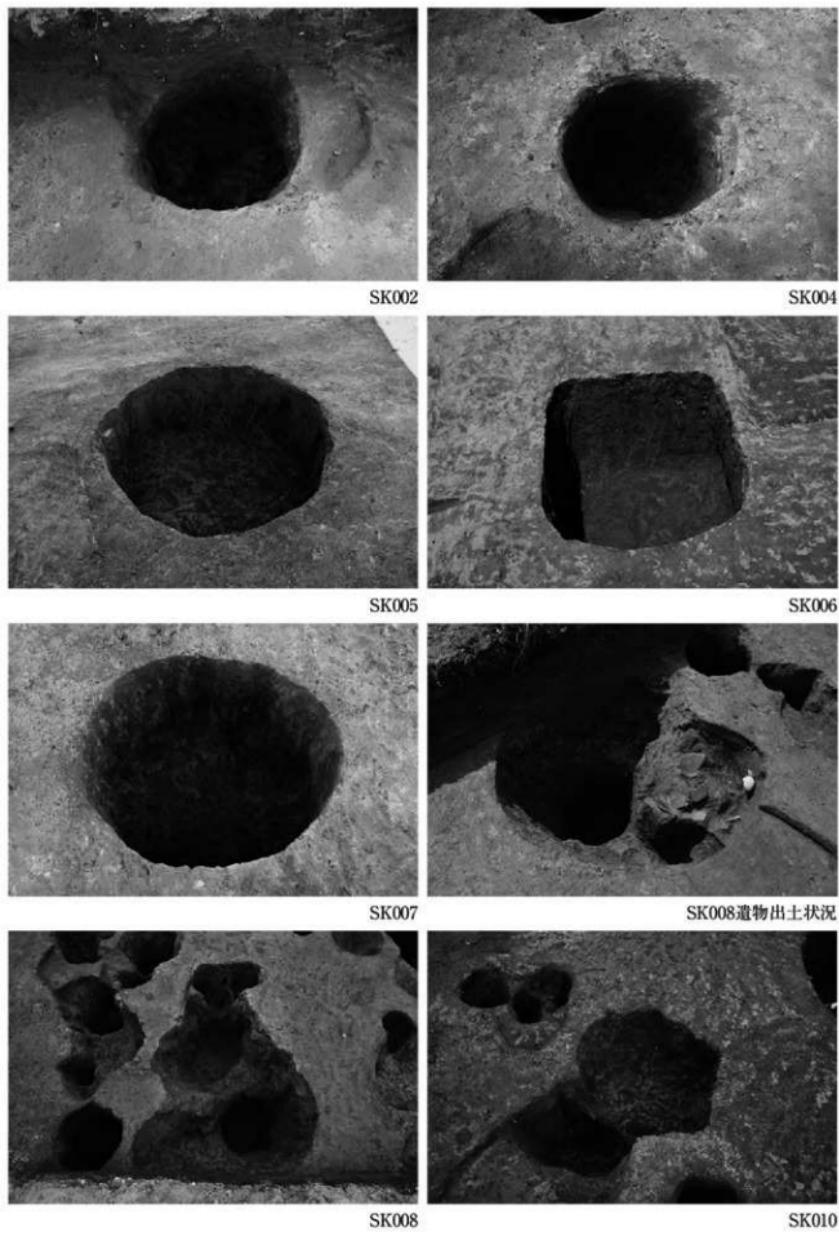


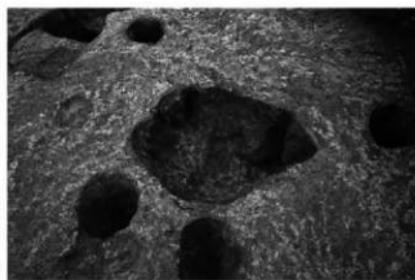
SI003



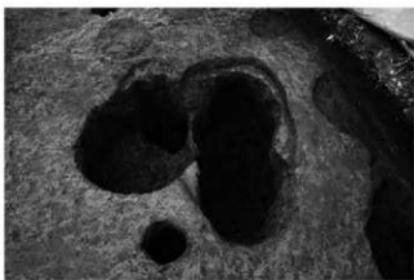
SK001

図版 4

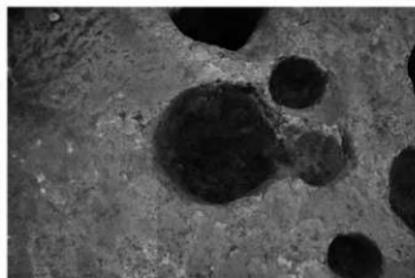




SK011



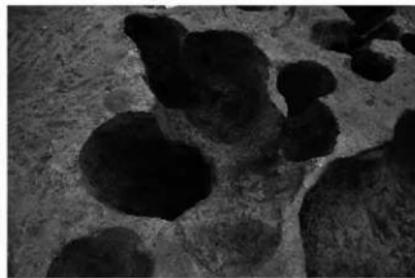
SK012・SH052・SH053



SK013



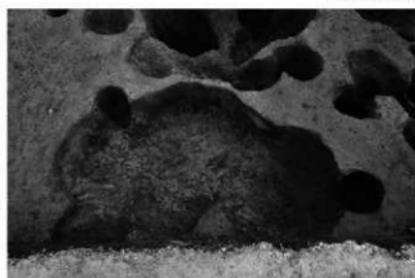
SK014遺物出土状況



SK014ほか



SH047遺物出土状況

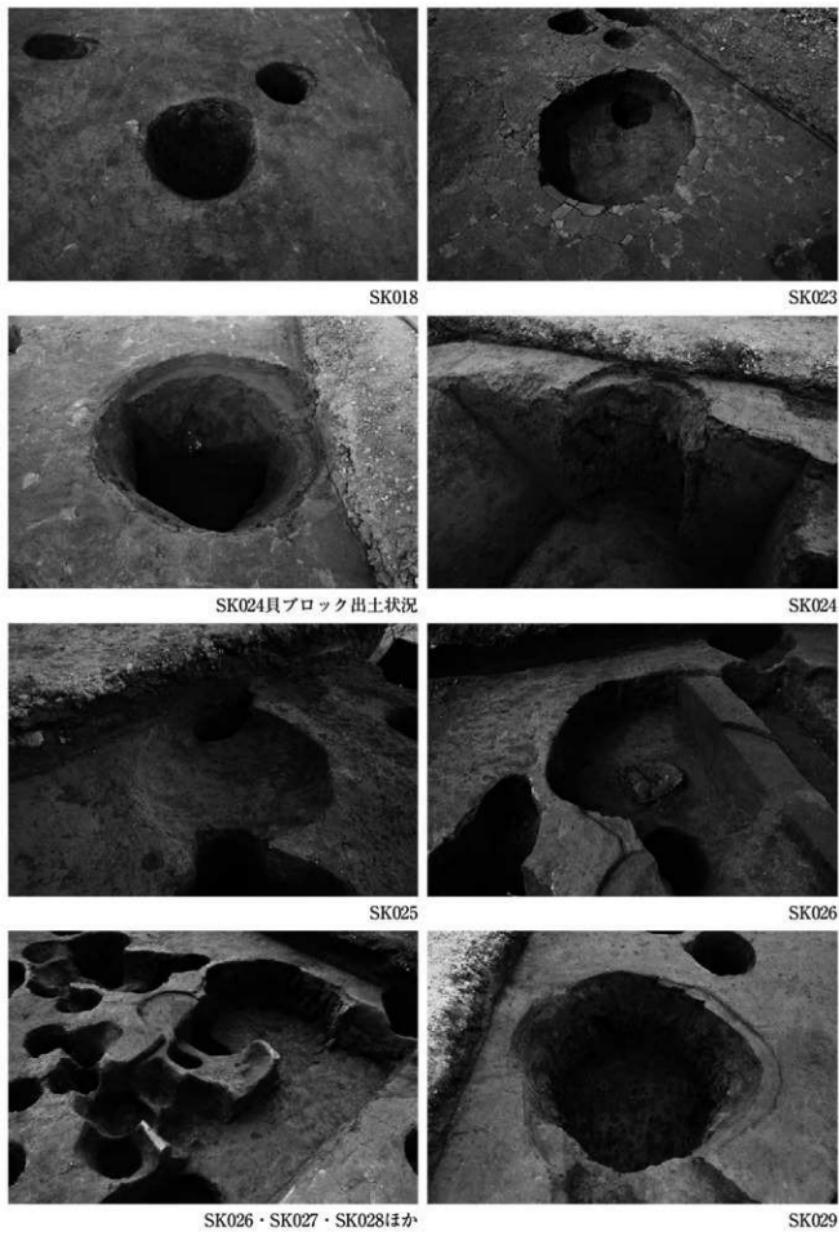


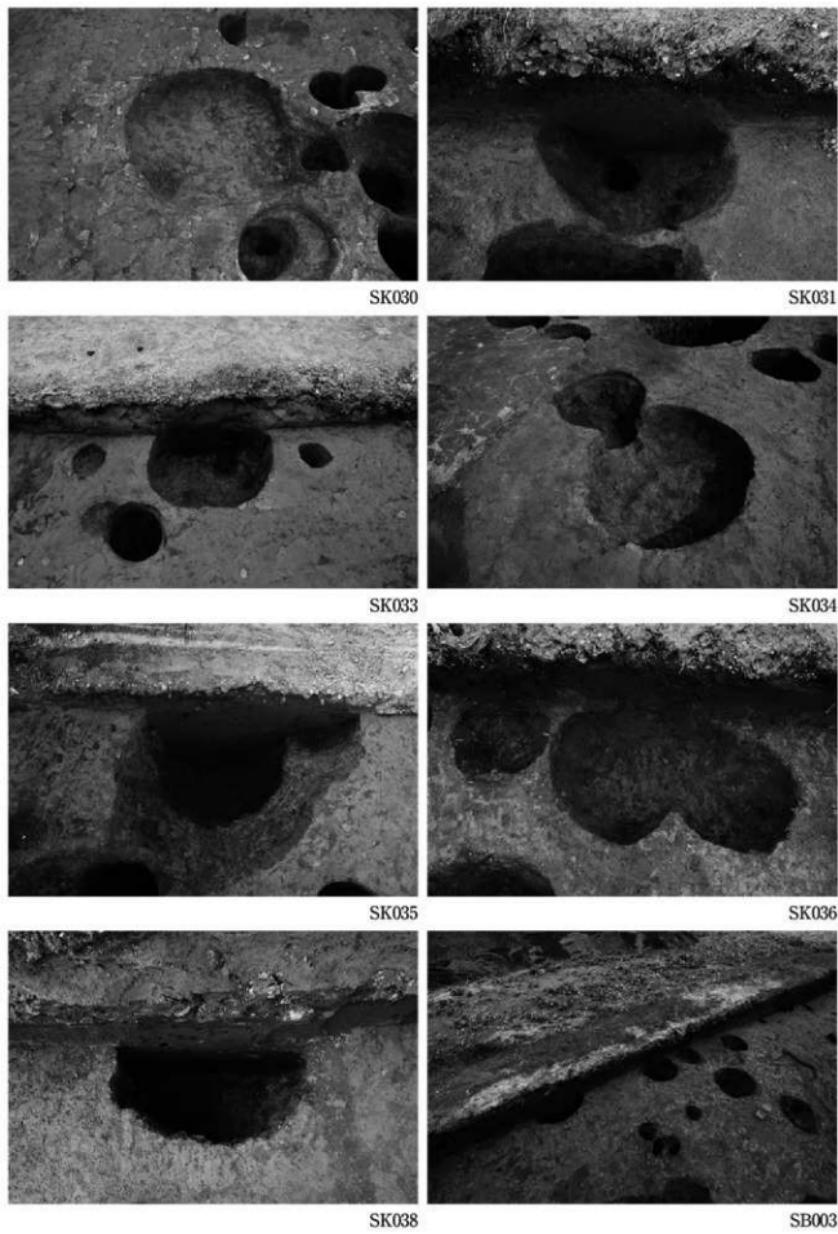
SK015・SK040・SH047



SK016

図版6





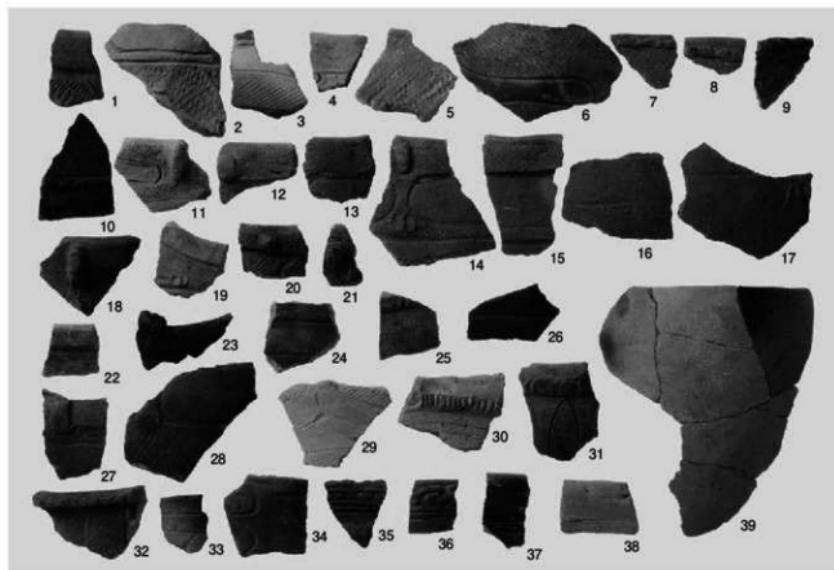
図版8



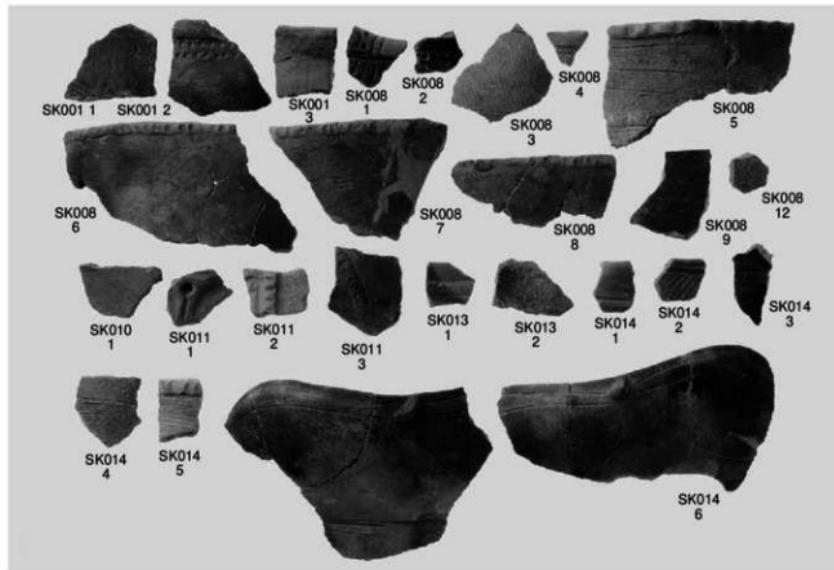
SB001・SB002



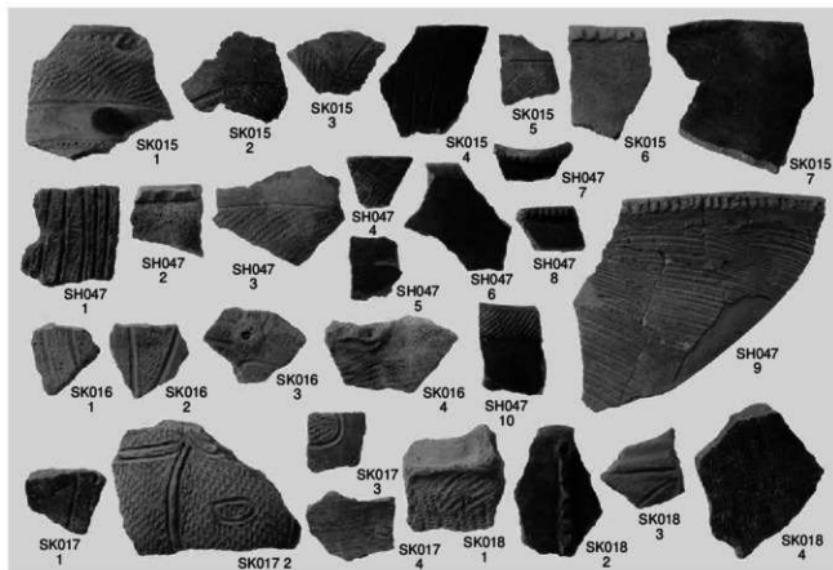
遺物包含層土層断面



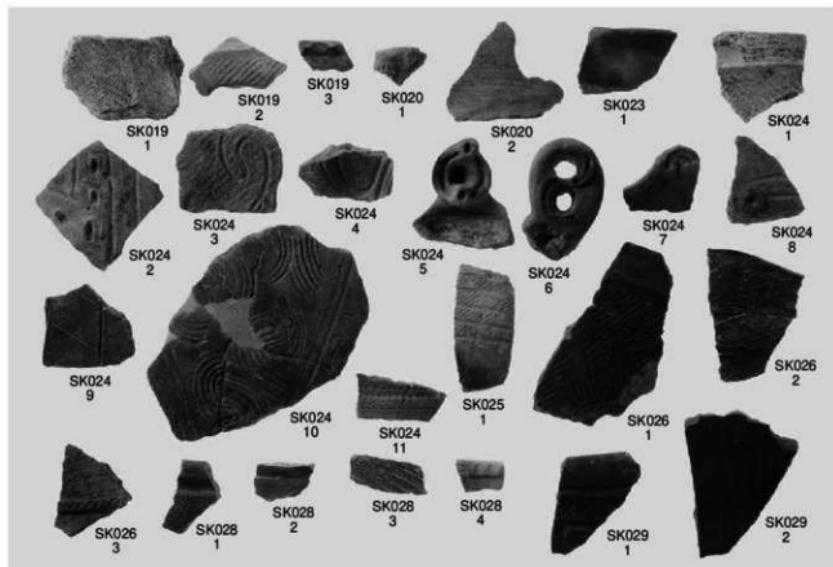
SI001出土遺物



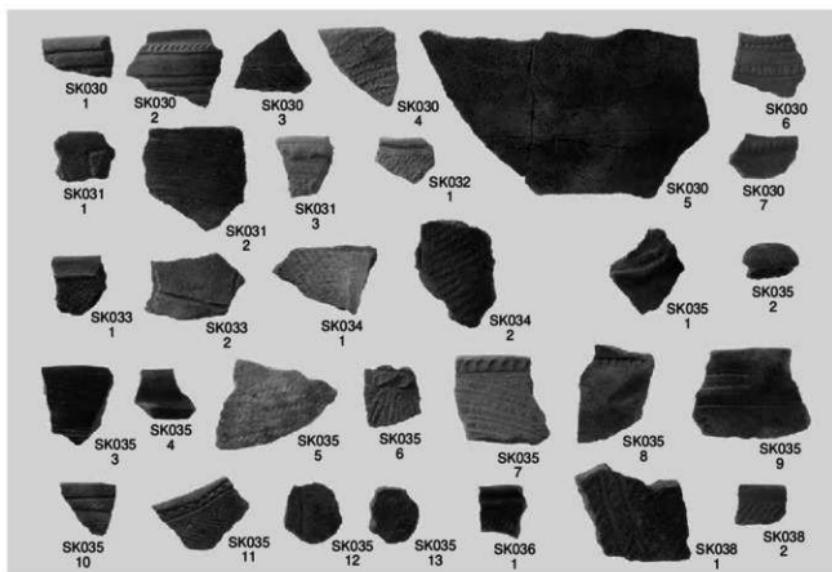
縄文時代土坑出土遺物（1）



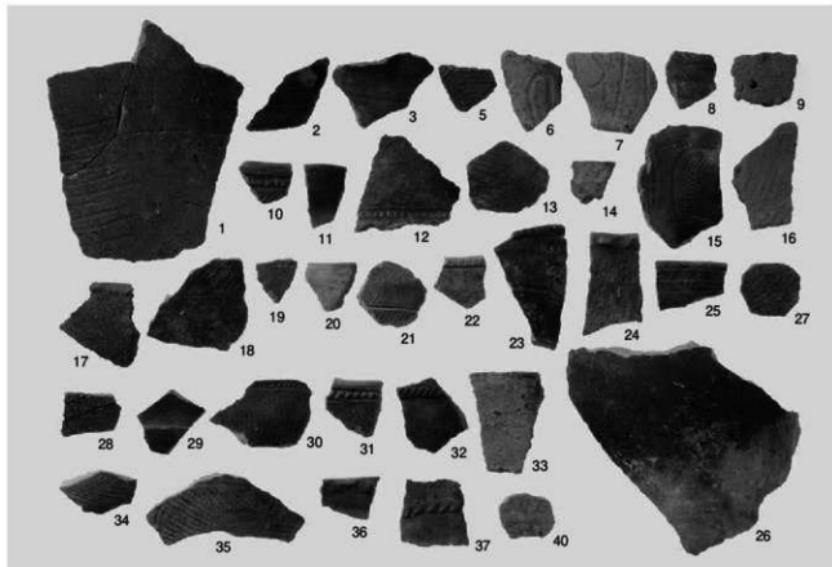
縄文時代土坑出土遺物（2）



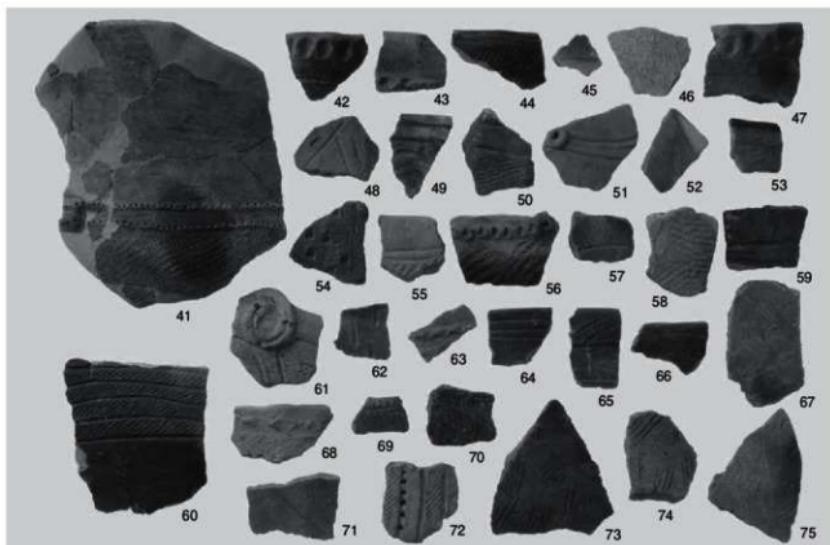
縄文時代土坑出土遺物（3）



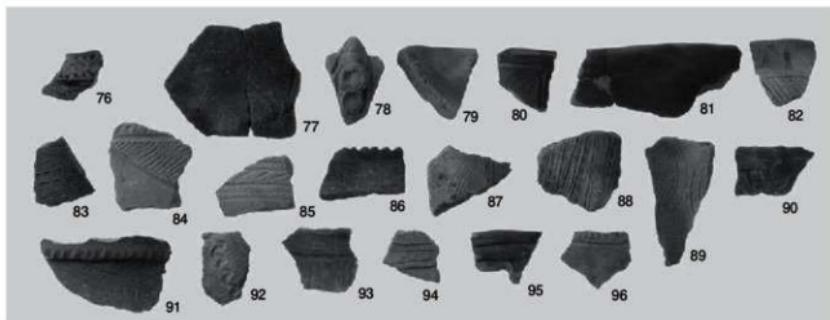
縄文時代土坑出土遺物（4）



ピット群出土遺物（1）



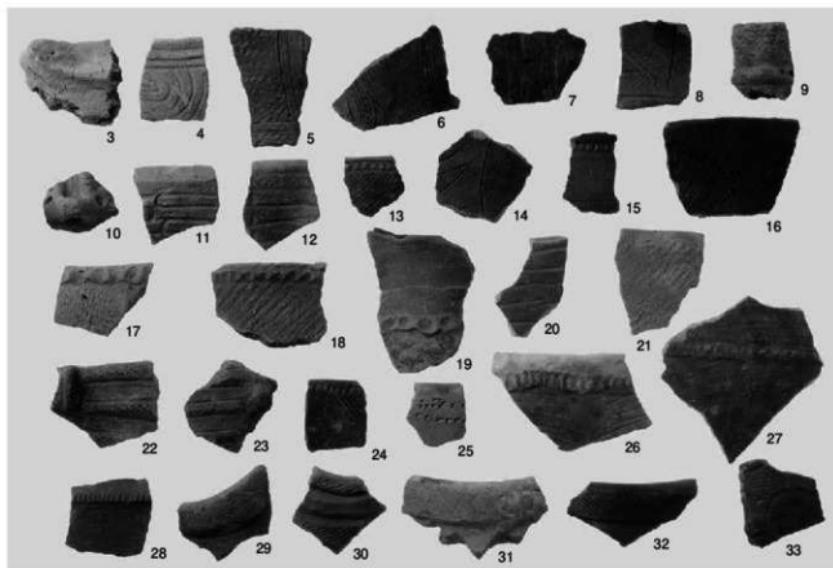
ピット群出土遺物（2）



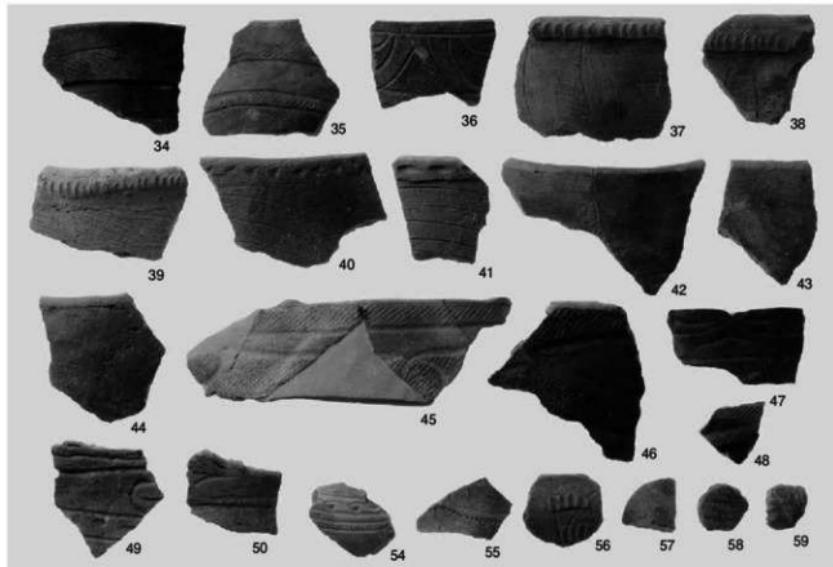
ピット群出土遺物（3）



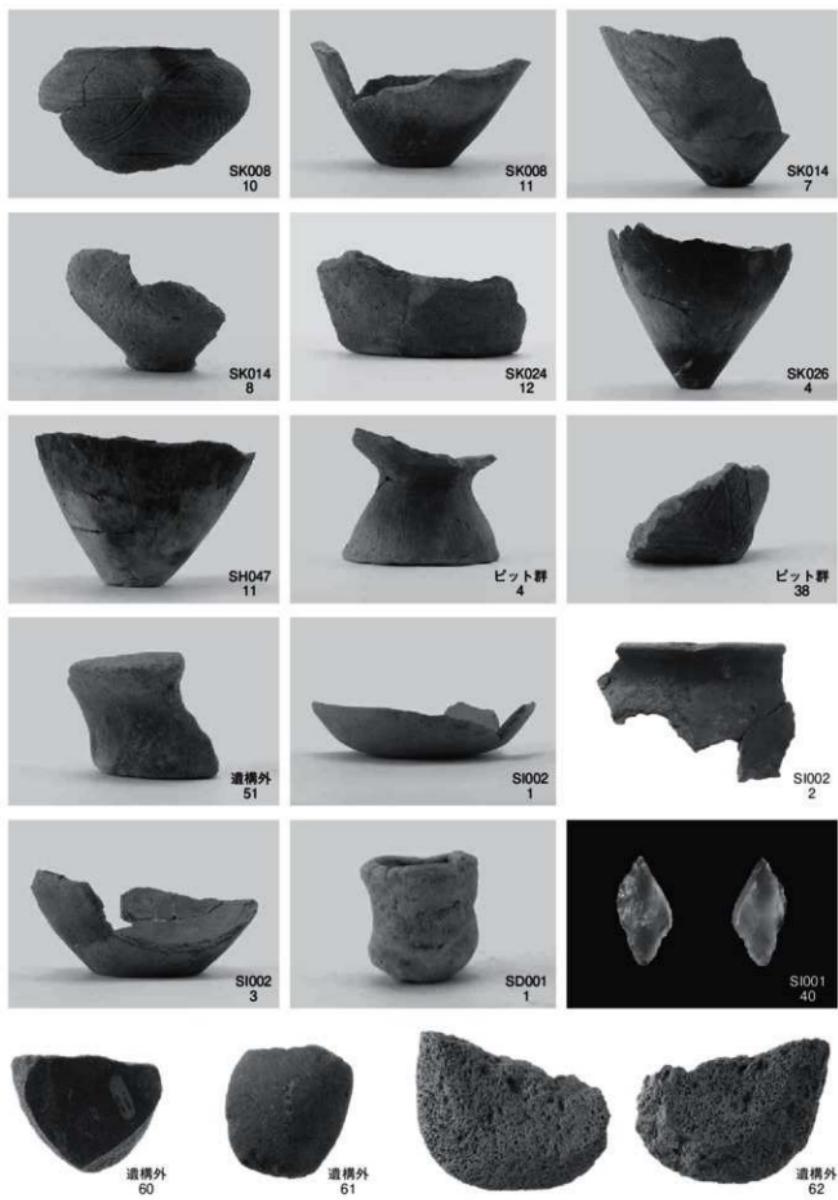
遺構外出土遺物（1）



遺構外出土遺物（2）



遺構外出土遺物（3）



縄文時代遺物・古墳時代以降遺物・石器

報告書抄録

ふ り が な	しばやまちみやごうだいいせき							
書 名	芝山町宮郷台遺跡							
副 書 名	主要地方道八日市場八街線歩行者道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷 次								
シ リ ー ズ 名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第40集							
編 著 者 名	菅澤由希							
編 集 機 関	千葉県教育委員会							
所 在 地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL 043-223-4129							
発 行 年 月 日	西暦2022年3月25日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやここうだいいせき 宮郷台遺跡	さんじゆくさんしらばやまち 山武郡芝山町 小池946ほか	12409	050	35度 41分 35秒	140度 24分 38秒	20210802～ 20210930	606m ²	道路整備工事
世界測地系								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
宮郷台遺跡	包藏地 集落跡	旧石器時代				石核		
		縄文時代	竪穴住居跡1軒 土坑31基 ピット群1か所 後・晚期遺物包含層1か所			縄文土器、石器		
		古墳時代～ 奈良時代	竪穴住居跡2軒 掘立柱建物跡3棟 土坑5基 溝状遺構1条			土師器、須恵器		
		中・近世	土坑2基					
		要 約	本遺跡からは、縄文時代および古墳時代～奈良時代にかけての遺構が検出された。縄文時代のものとしては、晚期前葉に位置付けられる竪穴住居跡のほか、後期中葉から晚期前葉を主体とする遺構群が検出された。晚期前葉の竪穴住居跡は入口施設を伴うもので、柱穴の配置等から建築替えが複数回行われたことが想定される。					
	古墳時代～奈良時代については、遺構の分布は薄いものの、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出された。過去の調査成果により、当該時期の集落が台地上に広がることが知られているが、それが台地の縁辺部まで展開していたことが明らかとなった。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第40集

芝山町宮郷台遺跡

—主要地方道八日市場八街線歩行者道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和4年3月25日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

株式会社弘文社

市川市市川南2-7-2
